「おいしいのは當り前だよ。奥様が眞心こめてお作りなすつたんだから。」
「おゝ　今夜の料理は智恵子がしたのか。
道理で少し味が違ふと思つたよ。」
智恵子は笑つて、
「不調法でございますけれど、たけに代つて致しましたので、馴れませんので、お味がとてもいけないんでございませう。」
「いや　そんな事はない。非常においしいよ。
お世辭じやない。本當だよ。ねぢいや。」
「本當でございます。奥様は何をなさるにも、眞心からなさるから、一寸したお野菜でも、よくお味がついて、おいしいでございますだ。」
「全く野菜といふものは、醤油の用ひ方一つだね。
智恵子、お前も一杯飲まないか。」
「では一つだけ頂戴致します。」

と智恵子は杯を頂いて、敏郎に注いで貰つて、淑かに下に置きました。
「あのお母様をお迎へに參らなければいけませんでせうか。」
「迎へに行つて、却つて叱言を言はれてもつまらないが……　どうだらうなあ。」
「でも默つて居りましては、私の立場がございません。」
「ではぢいや、御飯がすんだら、一寸様子を見て來てお呉れ。
お母さんが泊ると言はれたら、それでもいゝが、成るべくならお歸り下さる様につて、懇ろに言つて來てお呉れ。」
「はい／＼。お夕飯を頂いてから、すぐ行つて參りますだ。」
ぢいやは夕飯を食べると、提灯を持つて出て行きました。
智恵子は戸締りなど嚴重にすると、夫の書齋へ入つて來て、
「今夜は何だか淋しい晩でございますのね。」
「お母様もぢいやもたけもゐないで、二人きりだから、こんな大きな家にゐては、淋しい様に思へるよ。」

「お母様はお歸り下さるでせうか。」

「さあ、どうだかなあ。

この頃どうしたんだか、お母さん固意地になつて、些細な事迄お前に叱言を言ふので、見てゐても氣の毒に思ふのだけれど、さうかと言つて、私があれこれ言ふと、却つて感情惡くするから、默つてゐるけれど、本當にお前にすまないよ。」

「まあ　何を仰有いますやら、私が行き屆きませんために、お母様の御機嫌を損じてばかり居りまして貴方に御心配かけてすみません。」

「お前が總てを、善意に解釋して呉れるから、私も非常に喜んでゐるんだけれど、お母さんも永い間、未亡人で、身代を守つて來て、今嫁を貰つて安氣になつたものだから、氣が弛んで、幾らか調子が狂つたんだよ。

それとまあ　私が言つては可笑しいが、永い間自分の目に入れても痛くない程、可愛がつて育てゝ來た私に、お前を貰つたので、二人の仲が睦じいのを見ると、安心して喜ぶ一方、何だか自分の持つてゐた、掌中の珠を、お前に奪はれた樣な感じがして

淋しいので、あんな風にお前に、何とか彼とか言つて、愚痴を言つて見るんだらうと思ふけれど、これも決して永いことじやない。

自分の親を賞めては變だけれど、元來物分りのいゝ、しつかりした人だから、今に自分の考へが間違つてゐた事が分れば、屹度優しい親切な母になるから、當分の間だけ辛抱して呉れ。」

「まあ　貴方から、そんな事を言つて頂くと、私何と申上げていゝか分りません。

お母様が私の樣な者でも、貴方の嫁として、置いて頂くお心があればこそ、色々と私の足りない所を御注意下さるのですわ。

それを私が愚かなものですから、早くお母様のお心持が呑み込めないものですから、色々御注意を受けますので、貴方に迄始終御心配頂いてすみません。」

身のやつれ

「お前この頃一寸痩せたじやないか。」
敏郎は痛はし氣に、ぢつと智恵子の顔を眺めて言ひました。
「さうでせうか。私痩せましたか知ら？
自分ではちつとも氣がつきませんけれど……。」
「氣のせいか、大分痩せた樣だよ。
去年旅行に行つた頃は、お前も幸福が全身に滿ちてゐたゝめか、ほんとうに健康さうだつたよ。」
「貴方もさうでございましたわ。」
「さうだつたよ、お互に幸福だつた。

世界中の幸福を二人で集めた樣だつて、お前言つたつけね。」
「あら　私は日本中の幸福を集めた樣だつて申しましたの。
世界中の幸福を集めた樣だつて仰言つたのは、貴方でしたわ。」
「さうだつたかね。ではお前より私の方が絶對的に大きな幸福を味つた譯だ。
ははゝゝゝ。」
「あの頃は本當に樂しうございました。
今から思へば、まるで夢の樣ですわ。」
「それならもう一度旅行に行かうか。ねえ智恵子」
「まあ　御冗談ばつかり。
でも今參りましても、心境が違ひますから、あんな純眞な晴れやかな心持になんかなれませんわ。」
「それもさうだね。では仕方がないから、いつまでも夢の跡を胸に抱いて、樂しむより外仕方がないね。」

「ほんとでございますわ。」
と言つてから、智恵子は暫く何事か考へて、言ひ惡さうにしてゐましたが、ふと顔を上げると、突然
「貴方、お話がありますの。」
「何だ　突然　話つて？」
「笑はないで下さいましね。
貴方　お父さんにおなりになるんじやないでせうか。」
敏郎はさつと、喜びに氣色ばんで、
「智恵子、赤ん坊が出來たのか。それ本當かい。」
「まだはつきり分りませんので、お母様にも申上げませんけれど、二月ばかりしるしを見ませんし、體の工合が變ですから、さうでないかと思ひますの。」
「素晴らしいぞ　智恵子、
本當だつたらお前に私は感謝するよ。

私は心ひそかに、赤ん坊の出來るのを、どれだけ待つてゐたか知れやしない。
お前さえ赤ん坊を生んで呉れたら、うちは一ぺんに幸福になるよ。
お母さんだつて、全く別人の様に變つて、智恵子でなければ、夜が明けないといふ様な調子になるに決つてゐるんだ。
それだつたら私は本當に嬉しいよ。」
「貴方本當に喜んで下さいますの？
私それだつたら、嬉しいんですけれど……。」
「喜ばないでどうしやう。
どんな金銀財寶より、一番尊いのは子寶じやないか。
子供が出來れば、それが何より大切な家の寶だ
お母さんだつて喜ばれるよ。
御先祖だつて、屹度喜んで加護して下さるんだよ。」
敏郎は赤ん坊が出來たと聞いて、無我夢中で喜びました。

幾代はその夜遂に歸らず、ぢいやだけ歸つて來ました。

二人はいつになく、遠慮する人もないので、夜更ける迄、色々と睦じく語つてから、床に就きました。

軈て敏郎は晝の疲れのために、すやすやと深い眠りに落ちました。

智惠子は夫の寢息を窺ふと、そつと起き出して、豫て用意しておいた着物に更へると、夫の枕邊に坐つて、泌々と夫の安らかな寢顏を眺め、心の中で、

「旦那樣、お許し下さいまし。

止むに止まれぬ事情のため、智惠子は斷腸の思ひで、お傍を去つて參ります。

假令何處の土地で暮しましても、照るにつけ曇るにつけても、貴方の御幸福をお祈り致します。私はお腹の子供を、尊い貴方の形見と思つて、一生この子のために、命を捧げて生き通します。

情ない智惠子だと、貴方はお怨みになりませうが、何れは私の心持の解つて頂ける時もございませう。

いつまでも〳〵御健康に、そして御幸福に。」

と祈り念じつゝ、合掌して伏拜み、こみ上げて來る涙を、ハンカチで押へ乍ら、後髪引かれる思ひで、夫の部屋を脱け出して、晝の間に持ち出しておいた、トランクを取出すと、裏門からそつと脱けて、闇の中に姿を消しました。

仇夢

智惠子が去つてから間もなく、敏郎は怖ろしい夢に襲はれて、はつと目が覺めました。

覺めると同時にむつくり起きると、全身にびつしより汗をかいてゐました。

敏郎は夢の中で、美しい智惠子と、景色のよい山の中の、きれいな瀧壺の傍に立つてゐました。

するとどうした事か、山の奥から、一匹の大きな猛獣が駈けて來て、自分達に迫つたので、

「危い!!」

と智恵子を庇ふ間もなく、智恵子は狂へる猛獣のために、底も知れぬ瀧壺の中へ突落されたので、

「あつ」と思つた瞬間目が覺めたのでした。

敏郎は汗を拭き乍ら、

「厭な夢を見た。」

と呟いて、智恵子の床を見ると、藻脱の殼です。

便所にでも行つたのかと思つて、暫く待つて見ましたが、それらしい氣配もありません。

「はて　おかしい。何處へ行つたんだらう。」

と言ひ乍ら、起きて床に手を入れて見ると、幾らか温か味はありますけれど、床を出

てから、餘程時間の過ぎてゐる事を感じました。

敏郎は急に胸が騒ぎ出して、便所からお勝手元などそこら邊りを覗いて、

「智恵子、智恵子。」

と呼んで見ましたが返事はありません。

「ぢいや、ぢいや。」

と呼ぶと、

「へい。旦那様、何でございますだ。何か起りましたゞか。」

「智恵子がゐなくなつたが、ぢいや知らないかい。」

「奥様が見えなくなつたつて？　それは飛んでもない事でございます。

昨夜はあんなに機嫌よく、旦那様と遲く迄、話して見えましたじやないか。」

「さうだよ。遲く迄話して、一緒に寢たんだが、今目を覺して見ると、寢床にゐないんだよ。」

「そんな妙な事がありますだか。」

ちいやはさう言ひ乍ら、起きて來ました。
二人であちこち探しましたが、矢張り智恵子の姿は、何處にも見えません。
敏郎は心を苛立たせて、あちらこちら探し廻つた上、部屋へ來てどつかり坐りました。
そしてふと机の上を見ると、手紙が一通載せてあります。
「何だ　これは？」
と手に取つて見ると、表は旦那様へと記し、裏には智恵子よりと書いてあります。
敏郎は躍る胸を押へ、封を切つて見ますと、麗はしい筆蹟で次の様な文字が認めてありました。

遺　書

お懐しき旦那様。

言葉でも筆でもお禮も感謝も申し盡されない程、御慈しみ下さいました海山の御恩に背いて、智恵子は我からお暇を頂いて行く、不心得な不貞な女でございます。
どうぞお叱り下さいませ。
實は先達から、心の内を打明けて、お願ひしてお許しを頂かうかと存じましたが、到底眞正面でお願ひ申上げましても、お許し頂けないだらうと存じましたので、不心得乍ら、無斷でお暇を頂いて歸ります。
その理由は既に御承知下さる通り、兄は家の處置を致しましてから、遠く南米へ參りまして、その後の消息もございません。
母は老いた身の置場所もなく、茂戸の叔父の家に厄介になつて居りますけれども、何彼につけて、心淋しく浮世を味氣なく暮して居ります事と存じます。
母の事を思へば、私はどうしても、ぢつとしてはゐられません。
藤村家の嫁として既に嫁がせて頂きました以上は、我が親兄の事を思ひますのは、心得違ひかも存じませんが、傷心を抱いて、淋しく叔父の家に涙の日を送つてゐ

る母を思へば、子としてどうしても見捨てゝおく事の出來ないのが、僞らない私の本當の心持でございます。

それがために私は決心して、この家を去らせて頂いて、母の許へ歸り、母の子として兄に代つて、母を慰め母を養つて上げなければならないと存じます。

いつまでも藤村家の嫁として、お母様に孝養を盡し、至らぬ身乍ら貴方に對して、出來る限り妻の道を盡し度いと存じますけれど、一つの身では二つの務めは出來ません。

ために思ひ切つて、お暇を頂いて歸ります。

假令お膝元を去り身は遠く離れましても、心は貴方の妻として、一生お傍を離れません。

そして今後どの様な境遇に立到りましても、決して再緣など致しまして、女の道を踏誤る様な事は致しません。

私は身に持つて居ります子供を、貴方の形見として、身命を捧げて教育致します。

この事だけは、天地神明に念じてお誓ひ致します。

尙私がお膝元を去つて、一生この世でお目にかゝる事がないと致しましても、若し數年後に私の生んだ子供だと言つて、貴方を父として尋ねました子がございましたら、男女に拘らず、貴方の眞の血を亨けた子供でございますから肩身が狹くない様に、世間を明るく歩ける様、我が子だと名乘つてやつて下さいませ。

それだけを特にお願ひ致します。

尙私がかやうな不心得な事をして、貴方のお膝元を去ります以上、貴方も定めし御立腹なさるでせう。

お母様もそれ見た事か、智惠子はこんな事を仕出來す様な、薄情な女であつたと、仰有るに違ひございません。

お母様は御聰明でお出で遊ばしますから、私の性根をよく〳〵見拔いてゐて下さいましたのでございます。

それだけにお母様に對して、私申譯なく存じます。

さりとて今の私としては、お詫びの申上げようもございませんから、不孝な嫁不貞な妻といふ名に甘んじて、去らせて頂きます。

唯この上のお願ひは、この後假令どの様に仰せ下すつても、私は再びこの家へは歸らせて頂く心待は毛頭ございませんから、よく〳〵その心持をお酌取り下さいまして、私の様な愚かな不貞な妻の事を、いつまでもお心におかけ下さいませず、愚かしき女とお笑ひ下さいまして、一刻も早くお忘れ下さいまして、私が去りました後、お母様好美様、又御親戚の皆様の御心に叶ひます方がございましたならば、お迎へ下さいまして、御圓滿に御幸福にお暮し下さいませ。お母様は天にも地にも掛け替へのない、大切なお母様、好美様は唯一人の貴方のお妹様でございます事を思ひますれば、お母様や好美様の御滿足遊ばされ、藤村家のために、最も適應しき奥様をお迎へ遊ばすといふ事は、貴方の最も重大な御責任であり、又貴方の名譽地位をお保ち遊ばす上に於ても、お大切な事と存じます。

何卒私の事に思ひ合せて下さいまして、いつ〳〵までも圓滿にお家が治まつて行きます様、よい方をお迎へ遊して頂きます様、只管念じ上げます。

貴方の大きな尊い御恩に背いて、貴方の胸から去つて行く身の、何を餘計な事をとの思召もございませうが、私は決してお母様のため、好美様のため、貴方のお爲を思ふ以外に、他意はございません。

唯去り行く身にも、貴方様や皆様のお身の上に、本當の御幸福が、一刻も早く訪れます様にと、唯一心に願つて居りますのでございます。

申上げ度い事は山々でございますが、胸が一杯に迫つてこれ以上申上げる事は出來ません。

お名殘惜しうございますが、これで筆を止めさせて頂きます。

いつ〳〵までも御機嫌よろしく御過し遊ばしませ。

愚かな智恵子より

お懐しき
旦那様

敏郎の手はわな〳〵とふるへました。
「何といふ事をするんだ。
一言半句も私に告げないで、昨夜迄あんなに平氣で話してゐたのに、何といふ心になつたんだ。魔が射したのに違ひない。
あゝ矢張りあの夢は正夢だつたのか。
かうしてはゐられない。」
敏郎は驚きうろたへてゐる彌助を一人我家に殘して、手早く着物を更へると、表へ飛び出しました。

月光を浴びて

敏郎の心は、無我夢中で、自分が今何處を歩いてゐるのか分りません。
いつか八幡の森も越えて、櫻堤の上を獨り歩いてゐます。
折から櫻は滿開で、見る限り霞のかゝつた樣に見えてゐます。
晝間は花見客で雜沓して取り散らした後も、眞夜中過ぎとて、犬一匹通つてはゐません。
寒い川風に吹かれて、櫻はチラ〳〵と散つて頰にかゝつて來ます。
美しい月光は、皎々と大地を照してゐます。
こんな夢の樣な、麗はしい夜乍ら、敏郎の心は全く闇でした。
時々足を止めて耳を傾けては、我を忘れて、
「智惠子、智惠子」
と呼ぶと、又山のこだまが、
「智惠子、智惠子。」
と答へました。
彌生の春ながら、何と淋しい夜半である事よ。

敏郎は男泣きに泣き乍ら、三里餘りの道を、ひた走りに走り續けて、智恵子の母が寄寓してゐる筥の茂戸の叔父の家を訪れました。

そして表戸をとん〳〵と叩きました。

思ひがけない夜中の訪れに、家人は吃驚して起きて見て、意外な人であるのに目を瞠り、

「まあ　貴方は、藤村さんではありませんか。

こんな夜中にどうしてお出でになつたのですか。」

「その御不審は御尤もですが、惠惠子が家出をしましたので、尋ねて參りました。

若しかお宅へ參つては居りませんか。」

「いゝえ　こちらへは、智恵子さんは來てゐません。」

「さうですか。一體どうしたのでせう。

ではすみませんが、智恵子のお母さんに逢はせて下さい。」

「まづどうぞお入り下さい。

今すぐに起して參ります。」

家人は敏郎を伴つて家へ入りました。

心の闇

間もなくとき江は出て來ましたが、その顏は哀れに蒼ざめてゐました。

「敏郎さん、智恵子が家出しましたつて？」

「さうです。私には何も言はず、語らず、昨夜はいつもより機嫌よく床についたんですが、目が覺めて見たらゐないのです。

そして机の上にこの手紙が置いてありました。」

「まあ、どうしたつていふのでせう。」

「こちらへ今晩伺ひませんでしたか。」

「參りませんね。一體あの子は何處へ行つたのでせう。
困つた事をして呉れましたね。」
「全く困つた事になりました。
しかしそれだつたら、かうしてはゐられませんから、すぐに歸つて極力捜します。
だがお母さん、智惠子は屹度、こちらへ來ると思ひますから、參りましたらすぐ知らせて下さい。
そして智惠子に言つて下さい。
子供迄出來てゐる仲だから、假令どんな事をしたつて、決して離緣なんかしないつて。そしてお母さんの事は、私が別に住みよい家を町に作つて、小間使でもおいて、氣樂に一生お過しになれる樣にします。
そして智惠子がいつでもお伺ひして、出來るだけお慰めもし孝行も出來る樣にしますから、決して逸まつた事をして、私を不幸のどん底に落し自分も不幸な境涯に落ちるのみか、罪なくして生れて來る、可愛いゝ子供に生れ乍らにして、不幸といふ運命

を負はせて呉れぬ樣、私が呉々も言つてゐたと、お母さんからよく〳〵言ひ聞かせて、こちらへ來次第智惠子を送り返して下さる樣にお願します。」
「貴方の仰有る事はよく分りました。
それにしても、貴方にも一口も御相談せず、突然家出をするなんて、何かさうしなければならない樣な事情があつたのではないでせうか。」
「それは分りません。
けれどもこの手紙で見ると、お母樣を見捨てゝはおかれないから、自分は藤村家を離緣して、お母樣の許へ行つて孝行すると、はつきり書いてあります。」
「そんな心をどうして起したのでせう。
それでは好雄があれだけにして、南米へ行つた事も水の泡になるのですのに。
私だつてあの子が子供迄出來た仲を、自分からお暇頂いて歸つて、どんなに親切に孝行して呉れたつて、親ですものどうして心から喜べませう。」
「今あれは姙娠して、つはり時の樣ですから、何となく感傷的になつて、家出をした

んじやないかと思ひます。
兎に角捨てゝおいては大變ですから、すぐ歸つて探しますが、智恵子がこちらへ參りましたら、すぐ知らせて下さい。
その上で智恵子が滿足する樣に、屹度私が處置します。
こんな事になるのも、私が氣づいてゐ乍ら、よい時機を見計らつてと思つて、お母さんを捨てゝおいたのが惡かつたのです。
どうかお母さん、許して下さい。」
「何を仰有るのです。
私はもうこの上、貴方のお世話にならうなどゝは夢更存じません。
唯々智恵子の幸福ばかり祈つてゐましたのです。
この上とて自分の事で、貴方に御心配かけやうなんて、決して思つてゐませんから決して私の事は御心配なく、智恵子の事だけはどうぞ、間違ひのない樣に、保護してやつて下さいませ。」

「お母さんにそれを言はれると、私は身の置き場もありません。
では智恵子が來ましたら、よろしくお願ひ致します。」
と敏郎は元來た道を引返しましたが、町へ入らぬ中に、夜は明けて終ひました。

運命の惡戯

敏郎はその後、身を盡し、智恵子の行方を捜しましたが、何處に身を潜めたのか、杳として消息が知れません。
それのみか、智恵子の母も亦、突如として茂戸の家を去つて、何處へか姿を隱しました。
大方智恵子が人知れず、母を誘ひ出して、こつそり何處かへ身を隱して、親子水入らずで暮してゐるだらうとの噂でした。

それにしても敏郎は思ひました。
「女一人の力で、年老いた母を伴れて、どうして生活を立てゝ行かうとするだらう。
軈て秋には生れて來る子供を、智惠子はどうして育てゝ行くつもりだらう。」
と思ふと、諦めかけても、亦矢も楯もたまらず、心が焦つて、智惠子の行方を搜しました。
したが、全然消息はありませんでした。
こんな事のために、敏郎も一時は、極度の神經衰弱に陷つて、此處彼處に湯治などに行つては、その傷心を慰して居りました。
幾代は我が願望叶へりと、内心微笑み乍らも、顏にも出さずに、
「親夫を捨てゝおいて、仲人にも相談もなく、勝手に家出をする樣な、女を搜したつて、仕方がないじやないか。
そんな不貞な女を何時迄も忘れずに、搜して見たとて何になると思ふのだえ。
よし居所が分つたとて、今更おめ〳〵歸つて來られるものでもなし、よし本人が歸つて來ると言つたとて、親戚や世間の手前、こちらでうちへ元通りに嫁として、入れ

られるものでもないんだから……。
もう智惠子の事は、惡い夢を見たと思つて諦めて、外から嫁を貰つた方がいゝではないかえ。」
敏郎は言葉激しく、
「外から家内なんか貰ひません。
智惠子が見付からなければ、私は一生妻は迎へません。
子迄出來てゐるんですから、世間や親戚へ義理だとか體面だとか、言つてゐられるものですか。」
「ではお前、智惠子がいつまでたつても見付からなければ、どうするつもりかい。」
「そんな事は私はちつとも考へ度くありません。」
だが結局は親と子です。
幾代は最後の手段で、奥の手を出し、敏郎を陷れて終ひました。
「嫁を貰ふ事を承知しなければ、御先祖に申譯がないから、お前の見てゐる前で、私

は命を斷ちます。

お母さんがこの世を去つた後なら、この家の身代を潰さうと、智惠子を探して伴れ戻さうと、お前の心委せにするがいゝよ。」

と罵り乍ら、女だてらに短刀など見せびらかします。

親の言付けを聞かぬ親不孝者奴、命を取るといふのなら、笑つて首をも差出し度い程の氣持でゐるけれど、お前の見てゐる前で、私は自殺すると、冗談にしろ、短刀の鞘など拔いて、今にも自殺しやうと見せかける樣な母の樣を見ては子としては、止めずにはゐられません。

其處が人には分らぬ、親と子の情愛です。

敏郎は男泣きに泣きました。

そして自己の慾望の一切を捨てる覺悟で、母や好美や叔父の侑める秀子を妻として迎へる事を承諾しました。

婚禮の日には、町の人が目を瞠る程、華やかな荷物が運び込まれました。

そしてこゝかしこでとり〳〵の噂が立ちました。

「今度藤村さんへ來る嫁御は、東京の五百萬長者の娘御で、女子大學卒業で、その上十萬圓の土產金か小遣か知らぬが、持つて來るさうだ。」

「素晴らしい話もあるものだ。

そんな嫁が來る位だから、藤村さんの御隱居が、先の嫁御をひどく虐めたのも無理はない。」

とわい〳〵騷いでゐます。

空蟬

敏郎はまるで魂の拔けた、空虛の樣なもので、秀子の嫁入りを、他所事の樣に、ぼんやりと眺めてゐました。

だが秀子は嫁いて來た日から、一生懸命で智惠子にも劣らじと、敏郎の機嫌を取るのでしたが、敏郎は全く笑はぬ人になつて、終始むつゝりとして、夫婦であり乍ら、睦じく語るといふ事はありませんでした。

それに反して今度は母の幾代の方が、秀子を氣の毒に思ひ、何とかして二人の仲がしつくりと、圓滿に行く樣にと、心を遣ふ樣は、並々ではありませでした。

そして朝から晩迄、

「秀さんや　秀さんや。」

と下へもおかず取り做し、來る人毎に、

「流石にうちの嫁は、高等教育を受けてゐますから、どんな事でも出來ない事はありません。

それに非常な親思ひで、細かい事まで、よくこそと思ふ程、よく面倒を見て呉ます。

うちにゐた時は、多勢の下女下男を使つてゐて、固い物と言へば、箸か茶碗しか持たなかつたのに、うちへ來てからは、雜巾がけから、私達の肩迄流して呉れます。」

と素晴らしい賞め方です。

かうして光りを失つた、變則的な家庭ではあるが、兎も角も幾代の力で、三年五年と維持されて行く中に、いつの間にか、二人の子供も出來て、冷たい乍らも表面だけは、圓滿な家庭としての形は保たれて行きました。

眞意を知る日

「もし〳〵旦那樣、藤村の旦那樣。」

敏郎は呼び止められて振返ると、それはねんねこに三つばかりの子供を負んだ、赤ら顏の婦人でした。

「おゝ珍らしい　お前はおたけじやないか。」

「矢張り旦那様でございましたね。
どうも後姿がよく似てゐらつしやると思ひました。」
「お前子供を負つてゐるが、お嫁に行つたのかい。」
「お暇を頂きましてから、二年たちまして、隣村へ嫁入り致しました。
今では二人子持でございます。」
「さうか。それは結構だね。うちは圓滿かい。」
「身分の低い、貧乏人でございますもの、圓滿も何もありはしませんけれど、生活に追はれて、夢中で働いて居ります。
お蔭様で體だけは丈夫に、毎日働かせて頂いて居ります。」
「それが何よりだよ。
今日はお前、何處へ行くんだ。」
「在所のお祭へ行くのでございます。旦那様は？」
「私は一寸用事があつて、隣村の役場迄行くんだが、同じ方向だから、一緒に行かう」

「それではそこの岐れ路迄一緒にお供致しませう。」
二人は竝んで歩き初めました。
たけは突然、
「旦那様、お宅様は皆様御健康でございますか。」
「あゝ お蔭でみんな丈夫でゐるよ。」
「それは御結構でございますわ。それで御圓滿でゐらつしやいますか。
今の奥様がお出でになりましてから、御隱居様は御機嫌よろしうございますか。」
「さあどうかなあ。
初めの中はえらい喜び様だつたけど、此の頃はね。」
「此の頃だつてお喜びでございませう。」
「さあ どうだかなあ。人の心持なんて、全く私には分らないよ。」
「何故ですの？旦那様。私は又旦那様のお心持が分らないと思つてゐるのでございますよ。

どうしてあんなお優しい先の奥様を、御離縁なさいましたの？」
「離縁だつて？　誰も離縁なんかしやしない。
あれが私に無斷で出て行つて終つたんだ。」
たけは驚いて、
「あら？　本當ですの？　旦那様が御離縁なすつたんじやございませんか。
私は又御隱居様と旦那様とが御相談の上で、先の奥様を御離縁なすつて、今の奥様をお迎へになつたと思つてゐましたのに。」
「そんな事があるものか。
お前がお父さんの病氣だと言つて、私の留守に實家へ歸つた晩だつたよ。
智惠子が無斷で家を出て行つたのは。
私はあれを見損つてゐた。
あんなひどい女だとは思はなかつたんたがね。尤も同情すべき所もあるんだが……
兄貴が意地つ張りで、家を破産して終つて、南洋へ行つて終つたので、お母さんが一人で親戚に掛り人になつてゐた。
それにうちとの關係もあんな工合で、お前の知つてゐる通りの行掛りになつてゐたので、智惠子も行かず、お母さんも來ず妙な事になつてゐたんだ。
それを私も氣がついてゐたから、早くお母さんを引取つて、安氣に暮せる樣にして上げようと思つてゐた矢先、智惠子が默つて飛出して終つた。
そしてお母さんと二人で身を隱して終つて、どれだけ探しても皆自分らなかつたんだよ。
それにその當時智惠子は姙娠してゐた筈だから、一層氣にかゝつて、どれだけ一生懸命になつて探したか分らないが、何處へ行つたのか、風の便りもないんだ。
だから私は心配して終つて、神經衰弱に陷つて、幾度か自殺しやうと思つた事もあるんだが、無理解なお母さんでも、私のためには大切な母だ。
その母を殘して、自分の身さへ始末すればいゝといふ樣な、無責任な氣にもなれないで、この世に未練はなくとも、母の情に引かされて、惜しくもない命を存へ、生き

た屍の様な氣持で、どうにでもなれといふ様なすて鉢で、今の家内を迎へたんだ。」

「でも二人もお子様がお出來になつたさうではございませんか。

お仲が睦じいから、お子様がお出來になつたんでせう。」

「いや、さういふ譯ではない、

唯機械的に子供が出來たんだよ。

それが證據には、眞實我が子であり乍ら、可愛いゝと思つて膝に抱いた事もないが家内とも眞實な心持で語り合つた事は、結婚以來一度もない。

だから私は家にゐる時は、淋しい心持でゐるけれど、外へ出た時だけ氣が晴れ〳〵として、生き甲斐を感じるので、自然外出が多くなつて困るんだよ。

今度の家内と言つたら、お前にだから言ふけれど、智恵子に比べたら、全く問題にならないよ。

する事なす事、一つ〳〵見てゐても聞いてゐても、頭が痛くなつて終ふんだ。」

「まあ　御夫婦で、そんな事つてあるものでせうか。

それにしても旦那様、私今迄誰にも話さずに、一人切りで秘密にしてゐましたけれど、旦那様が先の奥様を、恩知らずとか、義理知らずとか誤解してゐらつしやいますから、それでは餘りお氣の毒ですから、私本當の事を申上げます。」

敏郎は驚いて、

「本當の事つて、智恵子の事で、何か知つてる事があるのか。」

「全部　知つて居りますわ。

實は旦那様、かういふ譯ですわ。

先の奥様程お可哀さうな方はありません。

そしてあれ位御聰明な考への深い方はございません。

後々の事が圓滿に行く様にとばかりお考へになつて、一切の罪を御自身がお引受になつて、お母様のために去つて行くなんて、さも誠らしいお手紙をお殘しになつて、後で旦那様と御隱居様との爭ひが起らない様に、みんな自分一人の罪に被て、涙を呑んで、お腹に赤ちやん迄お出來になつてゐるのを、お引取りになつて、お身をお隱し

になつたのです。

けれども奥様がお宅をお出ましになつた本當の理由は、御實家のお母様故ではなく、幾ら奥様が辛抱しやうとなすつても、一刻もお出でになれない様に、御隱居様がお仕向けになりましたからでございますよ。」

とその當時、幾代と好美と叔父の勇三の密談を聞いたこと、又幾代が智恵子に、毒杯を盛る様な怖ろしい言葉で脅しつけたゝめに、智恵子が悲壯な決心をして、出て行く事を母に誓つたこと。

自分が之を立聞きしたゝめに、智恵子がその日の中に、澤山の衣類と金を與へて、父の病氣といふ名目で、俥で實家へ歸した事など、一切殘らず語りました。そして

「さういふ譯で私は、父が病氣でもないのに、奥様からお暇を出されました。奥様は私を後へ殘しておくと、お饒舌だから、旦那様に本當の事を告げるとお思ひになつたので、その用心のために私をお返しになつて、その後で誰にも傷をつけぬ様に、自分一人で罪を被る様に、手紙を書いておいて、こつそりお脱け出しになつたのでございます。

だから奥様は、どんな切ない思ひをして、お泣きになつたか知れません。

今だつて屹度何處かの空の下で、可愛いゝお子様をお抱きになつて、子守歌に迄旦那様のお名を呼んでゐらつしやるに違ひはありません。

どうせ後には奥様がお出でになつて、お子様がお出來になつた事ですから、今では皆様御圓滿にゐらつしやると聞けば、先の奥様はあんなお優しい方ですから、屹度心からお喜びにこそなれ、御不幸になる事なんか、塵程だつて願つてゐらつしやる様な事はありません。

ですから、旦那様も、かうなつたからは、何も彼も天命だと諦めて終つて、出來るだけ今の奥様やお子様にも懇ろにして上げて頂く方が結構でございます。

けれども先の奥様が、我儘で親を捨て夫を捨てゝ家出をした不貞者だ不孝者だなどといふ誤解だけは、解いて上げて下さいませ。

私が何よりの生證人でございます。」

おたけはさう言つて、そつと涙を拭ひました。
敏郎はそれを聞くと、今更乍ら驚いて、
「本當かおたけ、今の話の事は？
そんな事情だつたとは、今の今迄知らず、唯智恵子だけを怨んでゐた。
そんな事情だと知つてゐたなら、自分が家を出て終つてでも、今の家内なんか、貰ふんじやなかつたのに。」
と言つた敏郎の悲壯な面持を見ると、
「旦那様、何も彼も濟んだ事でございます。
今更そんな事を仰有つたとて、取返しはつきません。
唯私は先の奥様を、旦那様が誤解してお出でになりますので、それを解くために申上げましたまでゝす。」
「いゝよ。分つたよ。よく話して呉れた。」
敏郎はおたけと別れてから、いつ何處を通つたのか、自分でも氣付かない中に、役

場の前も通り過ぎ様として、はつと氣がついた位でした。

母は強し

智恵子は義理と人情と恩愛との柵にかゝつて、生木を引き割かれる様な、斷腸の思ひで、懐しい夫の家を忍び出ました。
そして堤の櫻に美しい月が照り映えて、神秘的な夜半ですのに、心なく川下から吹つける風に、ハラ〳〵と散る櫻の花を眺めて、
「あゝ」
と深い嘆息をつきつゝ、しを〳〵と夢心地で歩いてゐました。
と後から懐しい夫が、
「智恵子!! 智恵子!!」

と呼ぶ聲が耳に入りました。
智惠子ははつとして、
「見付かつては大變だわ。」
と道傍の櫻の大木の蔭に身を潜めてゐると、敏郎は尙も時々
「智惠子!!　智惠子!!」
と呼び乍ら、その傍を通り過ぎて行きました。
智惠子は堪り兼ねて、
「貴方!!　私此處に居りますわ。」
と呼びかけやうとしましたが、ぢつと唇を嚙んで堪えてゐました。
夫の姿が朧月夜に照らされてゐる彼方に消えて、足音が聞えなくなると、智惠子は大道に轉び出て、
「旦那樣　すみません。どうぞお許し下さいまし。」
と言つて、さめ〴〵と泣きましたが、暫くすると、又元來た道の方へ引返し、その姿

を町の中へ消して終ひました。
それから八年は、夢と過ぎました。
智惠子は、今は靜かな山里の村に、些やかな家を一軒借りて、母と今年八つになる明と、親子三人水入らずのつゝましい暮しをしてゐました。
智惠子は藤村家を出てから、暫く町の宿に身を潜めて、樣子を見てゐると、藤村家の捜索が非常に嚴しい事が分つたので、一ケ月餘り何處へも出ずに、忍んでゐました。そして少し捜索の手が弛んだ時、靜かに叔父の家を、夜更けてから訪れ、母のとき江に逢つて、總ての事情を語りました。
そして母を安心させ、叔父の力を借りて、人目に立たない、今の住家を借り受けて貰ひ、一先づそこに落着いて、親子水入らずで、淋しい乍らも、溫い生活を始めました。
そして一心に勉强して、夏毎年縣で執行される、尋常小學校本科正敎員の檢定を受けました。

すると天來聰明なためでもありますが、熱心に勉强した甲斐があつて、唯の一回で尋正の免許狀を受ける事が出來ました。

この時智惠子は、天の助けとばかり喜びました。

縣から免許狀を送り屆けられた時、智惠子は嬉しさの餘り、

「お母樣、これで赤ん坊が生れても、私達親子三人は、一生誰のお世話にもならずに、贅澤さえしなければ、幸福に暮して行けますわ。

喜んで下さい。」

「本當によかつたね。そんな體だから、幾ら一生懸命になつても、思ふ樣に勉强が出來ないだらうから、どんなに焦つても、今年は駄目だらうと思つてゐたのに……。」

「私も初めから、今年は見込がないと覺悟してゐましたけれど、天のお助けで、一度に全部合格させて頂きまして、こんな嬉しい事はありません。

だからお母樣、私が身二つになつて、何處かの學校へ勤めさせて頂く樣になれば、もう叔父樣から少しも補助して頂かなくても、私の力でお母樣と氣樂に過して行かれます。」

と言つて、二人は心から喜びました。

夫の形見

その秋の十一月初めに、智惠子は安々と玉の樣な男の子を生み落し、その名を明と付けました。

明は蟲氣もなく、不思議な程丈夫によく育ち、生際目鼻立から口元迄、敏郎そつくりの生寫しで、男の子には不思議なと思ふ程肌も美しく、その上幼兒乍らも何となく威嚴が備つてゐます。

智惠子やとき江の喜び方は一通りではありません。

「よくもこんな可愛らしい、よい子が生れたものだ。

この子は敏郎さんそっくりだよ。
何て美しい子だらう。そしてこんな子供だのに、何處となく賢こさうな、さうして威嚴が備つてゐるよ。」
「お母様、可愛いと思ふ慾目で見るから、人が見るより二倍三倍もよい子に見えるんですよ。
だけど私、こんな坊やが授つたんですもの。
この子の成長を樂しみに、總ての力をこの子に投げ込んで、この子を立派な人間に育てますわ。
それが私の唯一つの、天から與へられた大きな義務ですもの。
そして私の眞からの樂しみですもの。」
と言つて、智惠子は限りなく喜び、二人の愛はいつも明に注がれて、小さい家乍ら、喜びに滿ちて居りました。
その翌年一月から、智惠子は村の有力者の世話で、峠一つ越えた隣村の、尋常高等

小學校へ勤める事になりました。
そこは一里餘りの道程ですから、餘り通勤に遠いといふ程ではありませんが、峠越しの山道の事とて、幾ら急いでも、一時間はかゝります。
それに雨や風の日雪の日などは、可なり困難でありますが、そんな事は智惠子に取つては問題でありません。
唯誰の力にも縋らず、自分の力で懷しい母と可愛いゝ我が子を、安らかに養つて行けるといふ事が無上の幸福でした。
智惠子が朝出て、夕方歸る迄は、とき江は明のお守り役でした。
とき江は孫を、調子のよい、美しい聲で、子守歌を歌ひ乍ら、心をこめて慈しむのでした。

ねん〳〵ころりよ　おころりよ
坊やの母ちやんどこへ行た
あの山こえて里へ行た

里のおみやげ何貰うた。
でん〳〵太鼓に　笙の笛
と和やかにとき江の歌ふ聲が聞えて來ます。
天氣のよい日には、ねんねこの中にふつくりと負んで、お宮や學校の邊りの道を、靜かに歩いてゐる姿も見受けました。
そして夕方歸つて來た智惠子が、今日あつた一日の話を語つて母に聞かせたり、母から明の事、村に起つた一日の出來事などを聞き乍ら、張り切つた乳を明に呑ませる時は、何ものにも代え難い喜びでした。

幼な心

匐へば立て、立てば歩めと親心、

今日と暮れ、明日と明ける中に、月日に關守なく、八年の年は夢と流れて、明は數へ年八つになりました。
生れ乍らにして聰明な明は、いよ〳〵その天才を發揮して、誰が教へなくとも、一年生二年生位の智惠はついてゐましたので、四月學校へ入學しましても、初めから受持の先生が舌を卷いて、
「何て賢い子だらう。
珍らしく聰明な子だ。」
と、それに性質が從順で快活で、何とも言はれない、圓滿な福德の相を備へて、落着いてゐるので、誰からでも可愛がられる子供でした。
座敷の智惠子達三人の寢る八疊の間には、神棚が正面に嚴かに祀つてあり、その横には佛壇があります。
床の間には富士山の繪のついた、美しい掛軸がかゝつて、始終智惠子が心掛けては、四季の花をその前に活けるので、奥床しい匂りを漂はせてゐます。

その横には、二枚の大きな額がかゝつてゐます。
どちらも同じ二十五六の、上品な男の人の寫眞です。
智恵子はいつも、神様佛様を拜んだ後、必ずこの寫眞に向つて、懇ろにお辭儀をしますので、明は子供心に、何も分らない乍ら、神様佛様に向つて、可愛いゝ手を合せて、拜んでから、必ず母の通り、この寫眞に向つてお辭儀をするのでした。
だが大きくなると、この寫眞の人は誰だらう？　といふ不思議が起つて、四つ位の時から、
「これ　母ちやん　誰？」
と尋ねますので、智恵子は
「これは伯父様、こちらは明ちやんのお父様よ。」
と敎へました。すると明はすつかり覺えて終つて、人さえ來れば、すぐに寫眞を指さして、
「この人　明の伯父ちやん。こちらは明の父ちやん。」

と說明するのでした。
學校へ入つてから暫くすると、明は或る日智恵子に向つて、
「お母さん、僕のお父さんは、何うしてうちにゐないの？
みんなのお父さんは、誰でもうちにゐるのに。」
智恵子はいきなり悲しい事を問はれて、胸に釘を打たれた樣に感じて、さつと顏色を變へましたが、さり氣なく、
「明ちやんのお父樣は　天皇陛下の御用で、伯父樣とお二人で海を越えて、遠い南米といふ國へお出でになつたのよ。
だからお留守なのですよ。」
「遠い所つて、どれ位あるの？」
「お船に乘つて、海の上を五十日も六十日も走つて行かねば、行かれない位遠い所なのよ。」
「そんな遠い所へ、何故行つたの？」

お國のためにゐらしたんですよ。
明さんのお父様は、それは〳〵忠義な孝行な正しい方です。
だから大切なお國の御用で、遠い所へ行つて一生懸命でお勤めしてゐらしやるので
すから、明さんもお父様に負けない様な、立派な人にならなくちやいけませんのよ。」
「お父さんは何時歸つてゐらつしやるの？」
「明さんが中學を卒業する位の年になると歸つてゐらつしやいます。
だから明さんは、一生懸命で勉強して、小學校でも、中學校へ行つてからも、誰よ
りもよく出來る、立派な生徒になつて、お父様や伯父様がお歸りになつたら、喜んで
頂かなくちやなりません。
分つたでせう。」
「はい。よく分りました。
だけど僕、お父様がゐなくちや淋しいな。
友達のうち、みんなお父さんがゐるんだから……。」

智惠子は堪り兼ねて、
「明さん、そんな事は言はないで下さい。
貴方が大きくなれば、お父様や伯父様がよいお土産を澤山持つて歸つてゐらつしや
いますから……。」
嘘と眞を半々にして、明を慰め乍ら、そつと涙を拭きました。

智德の芽生え

こんな事があつてから、明は清書等に二重丸を貰つた時などは、必ず母や祖母に見
せてから、
「お父さんに見て頂かう。」
と言つて、ちやんと寫眞の前において、

「お父さん、お清書を見て下さい。」
と生ける人に言ふ如くじつと、懐し氣に、父の寫眞を眺めるのでした。
誰も教へないのに、朝學校へ行く時は、寫眞の前に坐つて、
「お父様　伯父様、學校へ行つて來ます。」
と言つて頭を下げて出て行き、歸つて來ると、すぐに座敷へ行つて、
「お父様、伯父様、只今歸りました。」
と挨拶する事を忘れませんでした。
智惠子は我子ながら、驚く程聰明な明を見る時、
「この子が大きくなつて、六年を卒業すれば、中學へ入れなければならない。
さうするのには、いつまでもこんな田舍にゐては仕方がない。
中學のある町へ出て、あの子を勉强させるのには、小學校の先生といふ、今の樣な
待遇では、明の學資どころか、生活費にも足りない。
だから何とかして、今の中に、自分の知識と地位と收入を向上する工夫をしなけれ

ばならない。」
と思ひつくと、疲れた體を無理に鞭打つて、自分の好む道である裁縫の文檢を受ける
準備のために、勉强を始めました。

母ごゝろ

そしてその年の秋、試驗を受けて見ますと、幸ひに豫備試驗に合格しました。
智惠子は夢かとばかり喜び、
「お母さん、豫備試驗が通つたんですよ。」
「まあ本當かい。よく通つたこと。」
「私も今度は駄目かと思つてゐましたのに、意外でした。
この分だと本試驗も、工合よく通れるかも知れませんから、本氣になつてやつて見

ますわ。」
とき江も喜んで
「無理をしない程度で、出來るだけ勉強して見るといゝよ。
無理をして、病氣にでもなると大變だから……。」
と注意しました。
だが折角やるとなれば、合格し度さの一念で、智惠子は朝は暗い中に起きて學校へ出かけますが、秋の日足は短いので、夕方は日がとつぷり暮れなければ歸つて來ません。
明は祖母の止めるのも、聞かず峠迄迎へに行くのでした。そして
「お母さん。」
と呼びます。その聲を聞くと、智惠子は嬉しさのために、胸が一杯になつて、
「はい、明さん。」
と返事をし乍ら、足も輕く、いそ〳〵と登つて來るのでした。

「明さん、こんな寒い雪の降る晩には、うちでお炬燵にでも當つてゐればいゝのに、お母さんを迎へに來て呉れたの？」
「お祖母さんも、雪が降るから、うちで待つてゐよと仰有つたけど、お母さんが氣の毒だから、迎へに來たの。」
「有りがたう。だけど風邪を引いたら大變よ。」
「僕よりお母さんが、こんな時に風邪を引いたら大變じやないの？。」
「明さんは母さんの事を、そんなに心配して呉れるの？
「僕昨夜、夢を見たんだもの。」
「夢？　どんな夢を見たの？」
「お母さんが大病になつて、お祖母さんと僕が、困つた夢を見たんだもの。」
智惠子は目を瞠つて、可愛いゝ我子の顔を見凝め、
「まあ、そんな夢を見たの？
それは餘りお母さんの事を心配してゐるから、そんな夢を見るんだよ。

お母さんの事は、ちつとも心配しなくつてもいゝのよ。
もうすつかり、この道は馴れてゐるんだから、何ともないのですから……。
それよりお前が病氣にでもなると、お母さんもお祖母さんもゐても立つてもゐられない程心配するからね。」
「僕は大丈夫ですよ。級中で一番丈夫なんですから。
僕一度だつて、病氣した事なんてないでせう。」
「本當に明さんは、病氣した事がないのね。
だから明さんは、日本一の親孝行ですよ。」
「どうしてですか　お母さん。」
「貴方の體が丈夫であれば、お母さんもお祖母さんも、ちつとも心配しなくていゝんですから……。
眞面目で勉强して、いゝ成績を取るから、お母さんだつて、お祖母さんだつて心から喜んでゐるんですよ。」

「僕もつと、これから眞面目で勉强して、いつも誰にも負けない樣に、いゝ成績を取る決心だけど……
お母さんの事を思ふと、僕とても心配なの。
若しお母さんが病氣になつたら、どうしやうかと思つてね。」
「何故そんな事を思ふのです？」
「だつて他所のうちと違つて、お父さんがゐないんだもの。
お母さんが病氣になると困るんだから。」
智惠子はそれを聞くと、胸が一杯になりました。試みに
「そんな事はないけれど、若しお母さんが病氣になつたらどうするの？」
「困るなあ。僕眞劍で、寢ないでも看病して上るけれど……。
學校なんか休んだつていゝから……。でもお母樣か寢込むと、困るなあ。」
賢い子供だけに、氣がついても、生活の道に困るとは言はないけれど、困るといふ意味は、その言葉の中に、全部含まれてゐる事を知つてゐる智惠子は、

「こんな幼い子供なのに、まさかの時はどうなるだらうといふ心配を、常にしてゐるのか」

と思ふと、血を吐く様な思ひが、胸に迫りました。親と子は、吹雪を同じ毛絲の襟巻で避け乍ら、しつかりと相抱き合つて、家へ歸りました。

中へ入ると母が戸口に待兼ねてゐて、

「おゝ　歸つたか。えらい雪で大變だつた。

明よく迎へて來たね。二人共、さあ炬燵へお入り。」

と二人を下へも置かぬ程、懇ろに申します。

どんなに溫い炬燵よりも、食物よりも、母の心の溫かさに、智惠子は又感謝の涙に暮れるのでした。

こんな時、智惠子は

「あゝ　矢張り私は日本一の幸福者だつた。」

と泌々感じるのでした。

病魔に冒されて

明の夢は正夢でした。

智惠子は寒い日に、山道を通勤するのみでなく、餘り夜更しして、勉强したゝめに、疲れ切つてゐる所へ風邪を引いて寢込みました。

しかし本試驗の日には、三十八度以上の熱があるのに、上京すると言つて、母や明が心配して止めるのも聞かないで、仕度をしましたので、明は心配の餘り、學校を休んでついて行く事に決めました。

「ではお母さん、僕がついて行つて上げませう。」

智惠子は驚いて、

「明さんは、學校があるからいけません。

お母さんは一人で大丈夫です。」
だが明は承知しませんでした。
「體の惡いお母さんを、一人東京へなどやられません。
何と仰有つても、ついて行きます。」
と言つて聞かないので、とき江も、
「智惠子、明があんなに言ふのですから、伴れてお出で。
そんなに風邪を引いたまゝで上京して、どんな事にならないとも限りませんから、
まさかの時には子供でも、明は賢いから、屹度力になるよ。
私もその方が、どれだけ安心だか知れないから、賴むに伴れて行つてお呉れ。」
と勸めますので、智惠子もその氣になつて、明をつれて上京しました。
宿へついてからも案の定、ひどい熱が出ましたので、明は心配して、子供乍らも甲
斐々々しく、頭を冷すやら、藥を侑めるやらして、大人も及ばぬ程懇ろに世話をする
のでした。

そのためか、朝方には、幾分熱が引いたので、智惠子は試驗場へ行きました。
明は母が試驗場へ入つて行くと、控室で小さな胸を躍らせ乍ら、母の體の事を一生
懸命で心配して待つてゐました。
軈て顏色を土の樣にした母が、入口に現はれたと思ふと、
「明!!」
と一聲呼びました。
「お母さん。」
と駈け寄つて、明がその胸に縋りついた時、氣が弛んだのか、智惠子はそこで卒倒し
て終ひました。
智惠子がぱつちりと目を開けて見ると、其處は見馴れぬ部屋で、自分はベットの上
に寢かされてゐます。
傍には明と看護婦が默つてついてゐました。
「お母さん、氣がついたの?」

明は喜んで思はず叫びました。看護婦もほつとして、
「あら　本當に、お氣がつきましたね。」
智惠子は思はず、
「明!!　こゝは何處なの?
私は何處にゐるのでせう。」
「此處は慈惠病院ですよ。お母さん、心持はどんなゝの?」
「おゝ　私はあの時、氣絶したんですね。
誰がこゝへ伴れて來て下さいましたの?」
「お母さんが氣絶すると、洋服を着た、立派な方が多勢來て下さつて、自動車に乘せて、この病院へつれて來て下さつたのですよ。」
「さうでしたの。私ちつとも知りませんでした。」
看護婦は微笑んで、
「奥樣、何も御心配ありませんから、落着いて御養生なさいませ。

こゝは病院の中でも、特別に親切にして呉れますから……。」
と心から慰めて呉れました。
間もなく電報でこの事を知らせたので、とき江もすぐ駈付けて來て、親と子が命がけで介抱しましたので、そのためか、十日程たつと、大分よくなりましたので、物要りも大變だし、色々氣疲れもするからといふので、無理をして我が家へ歸りました。
この樣子を知ると、村の人も訪ねて來て、あれこれと懇ろに世話をして呉れます。
智惠子の勤めてゐる學校の先生方や生徒及びその父兄も、智惠子が常に神樣だと綽名をつけられてゐる程、教育に熱心で親切なため、
「篠原先生程、熱心な優しい先生は見た事がない。」
「全く神樣の通りだ。緻緻がよくて、人格が高くて、頭が素晴らしくいゝんだから……。」
と總ての人が賞めてゐたゞけに、我も〳〵と訪れて、樣子を見、何彼と世話をして呉れるので、智惠子も母も　人の世の人情の深さに、感激して泣きました。

身に浸みて嬉しきものは世の中の
人の心のなさけなりけり

常に誠と親切を信條として、生きてゐる智惠子の德は、かうした時に華が咲いて、重いいたつきのために虐まれて、床に臥す身も感謝の涙で胸は、一杯でした。

幼なき孝心

智惠子が健かでゐればこそ、僅かの給料で親子の生活は支へられてゐました。

その乏しい中から萬一の時の用意にと、毎月二圓か三圓づゝ、無理に給料から天引して蓄へておいた貯金も、東京へ行つたり、往復の旅費や入院費などで、全部使ひ果して終ひましたので、智惠子に高價な藥を呑ませるにも、醫師を招くにも、先立つて必要なのは、お金でありますので、とき江は智惠子に知られぬ樣に、差當つて必要の

ない衣類や、これだけはと殘して持つてゐた、先祖傳來の茶器や小道具などを、こつそり人に賴んで、町の古物屋に賣つて、僅かの金に代える、淋しい姿を、二度三度見た明は、子供心にも祖母が痛はしく思はれるのと、母の養生を充分にさせ度い心から、決心して、すぐ近所の親切な菓子屋の小父さんの所へ行つて、

「小父さん、僕お賴みがあるの。」

「何だ坊や、大人の樣に、賴みがあるなんて……。」

小父さんはさう言ひ乍ら笑ひました。

「小父さん、僕　お願ひだから、小父さんの所のお菓子を、賣りに歩かせて呉れませんか。」

それを聞くと、店の夫婦は驚いて目を瞠り、

「お前何を言ふのだ。どうしてそんな事をするのだ。」

「恥づかしい事だけど、お母さんが病氣でも、お金がなくなつたので、いゝお藥も買へないし、お醫者樣も賴めないし、卵や牛乳も買つて上げられないの。

だからおばあさんが、心配してゐるので、僕お菓子を賣らせて頂いて、お母さんのお藥や食物を買つて上げ度いのです。」

二人はそれを聞くと、驚き呆れると共に涙聲になつて、

「坊や、お前何て可愛いゝ事をいふのだ。

そんな小さな子供でゐて、大人も及ばない樣な事を言ふ。

では坊やは、私の所から菓子を分けて貰つて、村を賣歩いて、儲けたお金でお藥や卵や牛乳をどつさり買つて上げやうつていふんだね。」

「はい、さうするより外に仕方がないもの。

僕の所もうお金がなくなつたんだ。」

「さうかね。それで坊やがさういふ決心をしたんだね。」

「坊ちやんはえらいね。今からそんなに賢いんだから、大きくなつたら、どんなに偉い人になるか知れやしない。」

「それにしても坊や、どうしてお菓子を賣ると決めたんだね。

お前お菓子を持つて行けば、賣れる見込があるのかね。」

「小父さん。僕お菓子を賣らうと考へたのは、この間旅から七つ位の女の子が、お母さんとこの村へ來て、龜の子たわしを賣つて歩きました。

何處でも可哀さうだと思つたのか、一つづゝ買ひました。

僕のうちでもまだあるのに、お祖母さんが、六錢で二つ買ひました。

だから子供の方が、賣る事が上手だと思つて見てゐました。」

「それなら　坊は何故お菓子を賣る事に思ひついたの？

「小父さん、龜だわしなんか賣つたつて、一度は買つて貰へるけど、後は買つて貰へません。

だから旅の人はいゝけれど、毎日行く者は、たわしでは駄目だと思ひます。

菓子なら、その時に食べて終ふから、毎日だつて賣れるだらうと思ふの。」

小父さんは手を叩いて、

坊や、えらいよ。小父さんも感心した。

なあ　およね。坊やのいふ事は、大人も及ばないじやないか。」
「本當ですね。坊ちやんは何て悧好なんでせう。」
二人は感心して終ひました。
「では坊や、明日から小父さんがごつさりお菓子を問屋から取つておいて、その値段で分けて上げるから、坊やは賣れるだけ賣つてお出で。
十錢賣ると、三錢儲かるんだよ。
小父さんが、村の衆が屹度買つて呉れるお菓子を、箱へ入れて、背負ひよくしておいて上げるから、學校から歸つたら、賣りに行つてお出で。
だが始めはくたびれるぞ。」
「大丈夫、僕丈夫なんだから、屹度やります。」
だが子供の明に頼まれたからと言つて、無斷で計らう事は出來ないと言つて、人の好い親切な菓子屋の主人は、祖母をこつそり呼び出して、明の決心を傳へて相談しました。

ときぇは吃驚して、
「まあ　あの子が、そんな事を申しましたか。
うちの樣子を、薄々氣付いて、私に同情したり、母親を治し度いばかりに、そんな氣になりましたのでせうか。
あんな子供に、そんな事させられますでせうか。」
「折角あんなに決心したんですから、無理に止めるよりも、言ふがまゝに、二三日やらさせて見たらどうですか。
どうせ子供の事ですから、草疲れて終つて、自分から止めると言ひ出しませうから。」
「さうでせうか。
又こんな事は、智惠子には、聞かせ度くないんですが……。」
「默つてゐらつしやれば、分りはしませんよ。
他所の友達のうちへ行つて、夕暮迄復習させるといふ樣に、仰有つておけばいゝでせう。」

「ではさうしてお願ひする事に致しませう。」
と頼みました。
そしてその夜、夜更ける迄、勸めても寢ずに、智惠子の枕元で、一生懸命介抱して
ゐた明が轆て寢込むと、とき江はその天使の樣な顏をじつと眺め入つて、
「あゝ　世が世であつたなら、こんな小さな子に、こんな苦勞はさせないものを。
歷としたお父さんがあり乍ら、可哀さうに。」
と思ふと、思はずそつと涙を拭ひました。
翌日から明は、菓子屋の小父さんに面倒を見て貰つて、菓子の商ひに出る事になり
ました。
親切な主人は、家内に向つて、
「お前　御苦勞だが、始めだけ坊やについて行つて、かういふ話だから、成るべく買
つて上げて下さいと言つて、賴んで來てお呉れ。
その方が坊やが後で廻るに都合がよいから……。」

「さうですね。では今日だけ坊ちやんについて廻つて、賴んで上げませう。」
と言つて、小母さんは氣輕く起上つて、二百軒餘りある村を、悉く廻つて賴んで呉
れました。
そのためにその日は澤山買つて呉れる家があつて、持つて行つたゞけ皆無くなつて
終ひました。
歸つて利益を勘定すると、僅か三時間程の間に、三十錢餘りの利益が上りましたの
で、夫婦は我事の樣に喜んで、
「そら御覽、今日坊やは、二十八錢も儲けたよ。さあうちへ持つてお出で。」
と渡しました。
明は包み切れぬ程の喜びを顏に浮べ、
「小父さん、小母さん、どうもありがたう。」
と飛ぶ樣にしてうちへ歸り、祖母に渡しました。
とき江は目を圓くして、「本當にこれだけ儲かつたのかえ。」

「本當です。小父さんと小母さんが、よく勘定して、これだけ儲かつたと言つて下さつたんですよ。」

「さうかえ。驚いたね。こんなによく儲けてお呉れだつたね。」

明は之に力を得て、翌日から毎日、學校から歸るとすぐ、お菓子を背負つて村を廻りました。

その中にこの事が、學校の先生にも、友達にも知れたし、村中の人も孝行菓子賣りといふ評判を立てゝ、餘り欲しくない時でも、明が廻つて來れば、どこでも五錢位はすぐに買つて呉れるので、二三十間廻ると、すつかり賣れて終ひます。

かうして明は、毎日子供の力で、五十錢以上も、學校を終へてから、菓子賣をして、お金を儲けるのでした。

それがお母さんのお藥代、養生費になるのだと聞くと、村中の人は悉く感心して、「あんな小さな一年生位の子でも、親を思へばこそ、あんな苦勞をして、親に孝行を盡すのだ。

お前達もあの子を少し見習ふがいゝ。」

と我儘な我子をたしなめるにも教訓するのにも、皆明をお手本にするのでした。

明は晝間だけいたいけな身を惜しまず、一生懸命で母のために働くのみでなく、夜も更ける迄、枕邊に坐つて、懇ろに介抱して、祖母や母を嬉し泣きに泣かせるのでした。

そして知る程の人を感激させてゐました。

それだのに天はまだ、この孝子明を試練するためか、益々苦しみを加へさせるのでした。

それは智惠子の病氣が餘程快くなりかけて、幾らか床を離れて、歩かれる樣になつたので、世話甲斐があつたと喜んだのも束の間で、二三日の強い寒さに負けたのか、又もぶつと重つて枕が上らなくなり、加へて大熱を出して終ひました。

明は吃驚して、小さな胸を痛めました。

醫師を招いて診て貰ふと、首を傾げて、

「肺炎を起した様ですから、困りましたなあ。
入院なさらなければ、手當が難しいのですが……。」
と言ひました。とき江は驚愕して、
「まあ肺炎になりましたか。」
「急性肺炎です。」
「どうしても入院しなくちゃ駄目でございませうか。」
「お宅では器具が揃ひませんし、養生が難しからうと思ひますので。」
「困つた事になりました。うちで何とかなりませんでせうか。」
「どうも入院して頂かなければね。それに一刻も早くなくちゃいけないのです。
手遅れになるといけませんからね。」
醫師はさう言ひおいて歸りました。
とき江は顔蒼ざめて、途方に暮れて終ひました。
智惠子は苦しさのために、口も利けず、怖ろしく高い熱に、喘ぎ苦んでゐます。

明は母の哀れな様子と祖母の顔とを代る〳〵見比べてゐましたが、軈てその目から
ホロ〳〵と大粒な涙をこぼして、母の枕元にガバと俯伏しました。

神の導き

氏神様の森の中は、まだ薄暗く、杉の林に宿つてゐる鳩や烏さえ、枝を離れずに羽
をすくめて眠つてゐます。
社はしんとして、物音一つ聞えません。
その時お社の横の車井戸に、ガラ〳〵と音がしたと思ふと、ざあ〳〵といふ水音が
します。
五六回それが繰返されると、着物を着て、社殿へ上つて、拍手を打つて額いたのは、
大人かと見ると、小さな頑是ない少年明でした。

明は一生懸命無我夢中で、
「神様、どうかお母さんの病氣を治して下さい。
僕の命はなくなつてもいゝから、お母さんの病氣を治して下さい。」
と一生懸命に拜んでゐます。
聽て感極つて泣き出した樣です。
折から社參に來た立派な紳士が、異樣な物音に最前からの明の樣子を、じつと樹蔭から見てゐましたが、足音を偲ばせて、社殿の方に近づき、聽て明の後に立ちました。
明はそれとも知らず、じつと祈願をこめてから、ひよつこり立上つて、後を向くと、そこに意外にも人が立つてゐるので、吃驚して、思はず
「あゝ　吃驚した。」
と言ひました。するとその人は、
「坊ちやん、小父さんも吃驚したよ。
こんな早くから、坊ちやんの樣な小さい人が、一人でお宮へ來て、冷い水なんかかぶつて、何を神樣にお願ひしてゐるの？」

「小父さん、何處の人ですか。」
「私はこの村の者じやない。
他所村から用事があつて、昨夜來て村長さんの家に泊めて貰つたんだけれど、朝早く起きる習慣だから、お宮へお參りに來て、坊ちやんに逢つたんですよ。」
「だから小父さんは僕を知らないんですね。
僕のうちは、すぐお宮の向ふなのだけれど、お母さんが大病だから、神樣に治して貰はうと思つて、お願ひしてゐるんです。」
「坊ちやんのお母さんが大病ですつて。
それはいけませんね。」
と言ひ乍ら、つく〴〵その顏を眺めてゐましたが、聽て首を傾げ、
「私は何處かで坊ちやんを見た事がある樣な氣がするね。」
明も先程から、じつと紳士の顏を見凝めてゐましたが、

「僕は小父さんを、僕のお父さんじやないかと思ひましたよ。」
紳士は吃驚して、
「坊ちやんのお父さん？　何うしてそんな事を言ふのです？」
「だつてうちにある寫眞とそつくりだもの。」
紳士は顏色を變へて、
坊ちやん、今年幾つになるの？」
「僕八つですよ。」
「お母さんは何といふ名です。」
「智恵子。」
紳士は思はず、たじろぎました。

父と子

そして息を喘ませて言ひました。
「お前のお母さんは、若しか篠原智恵子といふんじやないか。
そしてとき江といふお祖母さんと一緒じやないか。」
「小父さん、よく知つてゐるんですね。
お母さんは篠原智恵子、お祖母さんはとき江です。
さういふ小父さんは誰ですか。」
敏郎はいきなり兩手を擴げて明を抱き上げ、
「坊や、小父さんじやない。私はお前のお父さんだよ。」
紳士は敏郎でした。明は飛上る程驚いて、

「お父さんですか。本當にお父さんなのですか。
それじや何時南米から歸つたんですか。」
敏郎は面喰つて、
「南米から何時歸つたかつて？」
「だつてお母さんは、いつもお父さんは
天皇陛下とお國のために、大切なお勤めで、伯父さんと二人南米へ行つて見えるから、僕が中學を卒業する時にならないと、日本へ歸つてはゐらつしやらないと言つてゐたんだのに。」
敏郎は一切を察して、
「おゝ　お母さんがさう言つてゐたのか。
よし〳〵その話はお母さんに逢へば分る。坊やは今お母さんが病氣だと言つたね。」
「はい、とてもひどいんです。
お父さん、早く行つて下さい。お醫者樣は、すぐ入院しなければ、命がないといふ

のです。だから困つてゐたんです。」
「入院しないと、命が危いといふのかい。
何故入院しないんだ。」
「だつて　お父さん、入院するお金がないんだもの。」
「おゝ　お母さんが入院するお金がなかつたのか。おゝさうだつたか。
坊や、もう心配するな、お父さんが來たからは、お金の心配はいらない。
すぐ病院へ入れて上げるよ。」
明は飛上る程喜んで、
「お母さんを病院へ入れて上げて下さるのですか。」
「あゝ　すぐ入れて上げるとも。それにしても、今朝此處で坊やに逢ふといふのは、
何といふ不思議な事だらう。」
明は眼を輝かして、
「お父さん、屹度氏神樣がお父さんを引張つて來て下さつたんですよ。」

「さうだ。それに違ひない。神様のお導きだ。
坊や、神様にお禮を申上げよう。
坊や、お前の名は何といふの？」
「明です。」
明は純眞玉の様な少年です。
父に勸められて、社殿の方へ向つて手を合せると、
「神様、永い間逢ひ度い〳〵と、夢の中でも祈つてゐた、お父さんに今朝逢はせて下さつて、有がたうございます。
お父さんはすぐお母さんを、病院へ入れて下さると言はれます。
だから屹度神様のお力で治して下さると思ひます。
有がたうございます。」
と生きた人に言ふ様に、お禮を言つて、ぽん〳〵と拍手を打つてお辭儀をしました。
その様子を見ると、敏郎の目からは、はら〳〵と涙が溢れ落ちました。

「お父さん、早くうちへ來て下さい。
そしてお母さんを見て上げて下さい。」
「さあいかう。ではお父さんが坊やを抱いて上げやう。」
「こんなに大きくなつてから、お父さんに抱かれたら、笑はれるから厭だ。
僕歩いて行きます。」
「さうだらうけれど、僕は初めて逢つたお前を、大きくなつてゐても、赤ん坊の様にしつかり抱いて上げ度いんだよ。」
「今お父さん、抱いたじやありませんか。」
「さうだ。だが今抱いたのは夢中だつたから、もう一ぺん抱き度いんだ。」
「さう、それならあの鳥居の所迄抱いて行つて下さい。
鳥居を出ると、みんなが見て笑ふから、厭ですよ。」
「よし　それじや鳥居の所迄抱かれてお呉れ。」
敏郎はさう言ひ乍ら、しつかり抱くと、自分の頰を明の頰に押つけ乍ら、

「坊やはお父さんがゐないので、淋しかつたゞらう。」
と言つたかと思ふと、明の胸に、父の涙がハラ〳〵と落ちかゝりました。
「お父さん、泣いてゐるんですか。」
「坊やに逢へて嬉しくつて、思はず涙がこぼれたよ。」
「僕も永い間逢ひ度い〳〵と思つたお父さんに逢へて、堪らなく嬉しいけれどお母さんの事を思ふと、胸が一杯になつて涙が出て來ます。」
と言ひ乍ら、明は父の胸にしつかり縋りついて、泣くのでした。

病める妻

明が夜明方に、ふと見えなくなつたので、とき江は
「あの子は何處へ行つたんだらう。」
と心配し乍らも、智惠子の容態が惡くて、手が離せないので、一人でやきもきし乍ら、頭を冷してゐる中に、早や夜は明け放れました。
「おゝ　嬉しや、夜が明けた。」
と、とき江が呟いた時です。
入口の戸がからりと開きました。そして
「おばあさん　おばあさん。」
といふ、明の元氣な聲が聞えました。
それはまるで人が變つたかと思ふ樣な力のある聲でした。
「まあ　明、こんなに朝早くから、何處へ行つて來たの？」
と障子越しに言ふと、
「おばあさん、お父さんをつれて來ましたよ。
僕お宮へお參りして、逢つたんですよ。」
とき江はその聲を聞くと驚いて、

「明お前は何を言つてゐるのだえ。」
この時障子がさらりと開きました。
そして「お母さん御免下さい。」
と言ひ乍ら入つて來たのは紛ふ方なき敏郎その人でした。
ときえは呆氣に取られて、
「まあ　敏郎さんじやないか。
どうして此處が分つたんですか。」
「お母さん、これこそ全く神樣のお引合せです。
用事があつてこの村へ來て、昨夜村長さんの所で泊めて頂いて、今朝お宮へお參りに來て、ばつたり坊やに逢つたのです。
そして事情をすつかり聞きました。
私が愚かなばかりに、お母さんにも智惠子にも坊やにも、大變な苦勞をかけましてすみません。」

「飛んでもない事です。お詫はこちらが申さねばなりません。」
「兎に角詳しい話は後にしておいて、一寸智惠子に逢はせて下さい。
どんな樣子で居りませうか。」
「肺炎を起しまして、怖ろしい熱ですから、我を忘れてゐますが、逢つてやつて下さいませ。」
「では一寸失禮します。」
と言ひ乍ら、敏郎は智惠子の枕元へ行きました。
そしてどつかりと坐ると、懷しさ嬉しさ又痛はしさに、躍る胸を一生懸命で押へ乍ら、布團に手をかけて、
「智惠子、智惠子、私だよ。敏郎だ。
分らないかい　智惠子、敏郎だよ。」
明も傍へ坐つて、
「お母さん、お母さん、お父さんをつれて來ましたよ。」

と一生懸命で呼ぶと、智恵子は苦しい中から、充血した目をふと開けて、枕元に坐つてゐる敏郎を見ると、分つたのか、

「あゝ、貴方!!」

と言ひました。

「おゝ　智恵子、私が分つたか。

永い間苦勞をさせてすまなかつた。

もう大丈夫だ。私が來たから安心して、しつかりして早くよくなるんだ。」

智恵子は感極つて、つと手を出すと、敏郎の手に縋り、

「貴方、お懷しうございます。」

「私も逢ひ度かつた。どんなに身を盡して、お前の行方を搜したか知れなかつた。

どうしてお前は本當の事を、私に打明けずに、家出なんかして呉れたんだ。」

「すみません。」

「叱るんじやない。私は逢へて嬉しいんだ。

智恵子、しつかりして、早く快くなつてお呉れ。

吃度私の一念で治して上げるよ。」

二人は固く手を取つたまゝ、暫くむせび泣きました。

ときは江も明も、一緒になつて泣いて終ひました。

間もなく近所の人達も駈けつけ、村長もやつて來ました。

そして町から自動車を呼んで、智恵子を靜かに自動車に遷し、大事の上にも大事を取つて、町の病院に入院させました。

しかもその室は清淨な美しい、特等室でした。

父と子

病院で年を越えた明は、今年九つになりました。

智惠子は、神明の加護か、危險な一瞬夫敏郎が訪れたゝめに、直ちに入院する事が出來、ありとあらゆる方面から、最善の力を盡したゝめ、漸く熱も下り、危險期を通過して、次第々々に薄紙を剝ぐ樣に恢復しました。

そして正月半ばには、にこ〳〵として、寢臺から下りて、廊下や庭位は散歩に出られる樣になりました。

この樣を見て、敏郎やとき江や明の喜びは、譬へようもありませんでした。

敏郎は三日にあげず、自動車で駈けつけて、出來るだけ病院に永くゐて、樂しく和やかに語つては歸るのでした。

敏郎は、八年目の冬が過ぎて、一度に春が來た樣な喜びで一杯だつたのです。

それは命懸けで愛してゐた、智惠子に再會した喜び、尤も一時は命さえ危險と思はれた重病が、今はすつかり全快して、日に〳〵元氣づき　前より一層優しく和やかな眞實の愛情を以て接して呉れる嬉しさに加へて、自分の眞實の愛情と眞心の結晶として、二人の中に出來てゐた明が、親の慾目のみでなく、心映えなり魂なり容貌なり、

普通の子供とは比べものにならない程の聰明さが、その全人格に滿ちて、智慧の固まりかと思ふ樣な優れた點を認め得た事であります。

敏郎は時々明の頭を撫でて、

「世に子寶といふ言葉を聞くが、お前こそ本當にお父さんの、何よりも尊い寶だよ。

といふのでした。

今日も晝過ぎにやつて來ました。

例の通り暫く和やかに話してゐると、明が

「お父さん、僕、お父さんに聞き度い事があるの。」

「何なのそれは？」

「だつてお父さんは、海を越えて、遠い一萬里もある南米へ行つてゐて、僕が中學校を卒業しなければ歸らない筈だつたのに、どうして突然歸つて來たの？

南米へ行つてゐたなんて、嘘じやありませんか。」

いきなり明がこんな質問をしたので、三人は吃驚しました。

「智惠子、お前は明に南米へ行つてゐると話したんだね。」
「えゝ。」
「どうしてそんな事を言つたのだ。」
「でも　この子がお父さんがゐないと言つて淋しがりますし、有ると知れば屹度お目にかゝり度いとせがむに決つてゐますので、色々お母さんと相談の上、兄さんと一緒に大切なお國の御用で、南米へ行つてお出になるから、明が中學卒業する頃でなければ、お歸りにならないと申しておきましたので、この子も安心して、座敷にかけてあります額の前へ座つて、朝夕學校の往き歸りには、必ず御挨拶しました。
學校の成績なども、屹度私やお母さんに見せるより先に、貴方の前　持つて行つて、お見せしてゐました。」
「さうか。よくして呉れた。明、お父さんはその度に喜んでゐたよ。」
敏郎の目には、涙の露が光りました。
「貴方、賞めるのではありませんけれど、明にも本當にどんなに苦勞かけましたか知

れません。
私が永い間患つたばかりに、この子は健氣にも、近所の親切な小父さんに賴んで、お世話して頂いて、お菓子賣り迄して、私のお藥や滋養物を買つて呉れました。」
「聞いた。すつかり聞いた。村長さんが皆話して下さつた。
知らなかつたとは言ひ乍ら、頑是ないお前にそんな苦勞をさせてすまなかつた。
よくお母さんを大切にして上げて呉れた。
お父さんから厚く禮を言ふよ。」
「それだけじやありません。私の勤めてゐました學校は、今迄住んでゐた家から、大きな峠を越えた向ふにありますので、秋の日が短くなるにつれて、歸り途は日が暮れます。
明はどんな雨の日風の日、雪の日迄峠迄迎へに來て、お母さんと呼んで呉れますので、私も嬉しさに、大きな聲で返事をしますと、いゝ聲で歌を歌つて待つてゐて呉れ

私はその聲に誘はれて、足も輕く、心もすが〳〵しく、知らぬ間に峠を登つて來て、明と手を取つて歸りました。

貴方にお別れして淋しうございましたけれど、貴方の形身の明が居りますので、行く日も來る日も、何とも言はれない、樂しい嬉しい、前途に大きな光を見凝めて行く樣な希望の日を送つて居りましたわ。」

「本當によかつたね。明よくお母さんやお祖母さんを喜ばせて上げて呉れた。お父さんはお前に、厚くお禮を言ふよ。」

敏郎はいきなり、明を胸に抱き締めて、頭を撫でゝいふのでした。

明は尙も不思議さうに、父の顏を眺め、

「だけどお父さんは、日本にゐたのか、南米にゐたのか、本當の事を聞かせて下さい。」

又三人は、顏を見合せましたが、敏郎は

「却つて隱さない方がいゝから、何も彼も話して聞かせるよ。」

智惠子は慌てゝ、

「それでは貴方、却つて爲によくない事はございませんか。」

「いや、秘密にしておく事は、却つて疑惑の種になつて、爲によくないから、何も彼もよく話しておくよ。」

と言つて、明を膝から下すと、きちんと坐らせ、自分も正しく坐つて、

「明、お母さんはお父さんが、南米へ行つてゐた樣に話して聞かせたさうだが、本當はお父さんは日本にゐたんだ。

そして縣は違ふが、お前のゐた家から十里も離れない所に住んでゐたのだよ。」

明は不思議さうに、

「それだつたら、何故お父さんは、僕等と一緒にゐないんです。

何處でもお父さんはうちにゐるのに、うちばかり何故別れ〳〵になつてゐたんです。」

敏郎はそれには、何と答へていゝか分りませんでした。

「お父さんもお母さんも一緒にゐ度かつたのだけれど、お母さんのお兄樣で、お前の伯父樣に當る方が、お國の御用で、南米といふ遠い所へ行かれたのだ。

そのためにお祖母さんが、お一人になられて淋しいものだから、孝心深いお母さんはお祖母さんと一緒にゐて孝行し度いため、お前がお母さんのお腹にゐる時に、お母さんはお祖母さんの所へ歸つて、お父様に秘密で、今迄居た家に移つて、お前を生んで、自分でお勤めをして、お前とお祖母さんと三人、樂しく暮してゐらつしやつたのです。」

傍ではら〳〵してゐたとき江も智惠子も、非常に解りよく、本當の事は言はないで、明が滿足に承服する樣に說明したので、ほつと安心しました。

「お母さん、本當ですか。お父さんの今のお話？」

「本當なんですよ。お祖母さんお一人になつて淋しいから、大切にして上げ度いと思つて、お父さんに內緒でお暇を頂いて、お母さんの所へ歸つたものだから、お父さんがお困りになつて、つれ歸られると大變だと思つたので、誰にも知れない樣に、今迄ゐた所へ移つて、一生懸命で勉强して、學校の先生になれる免狀を頂いてから、學校へお勤めして、お祖母さんとお前と三人で、樂しく生きて來たのです。

みんなお父さんの仰有る事が本當です。」

明は納得して、初めて滿足さうに頷きましたが、尙不思議が晴れぬ樣に、

「ではお父さんは今一人で見えるのですか。」

これには敏郎も、全く返答に詰つて終ひました。

智惠子もはら〳〵して、敏郎が何を言つて返事をするかと、耳を傾けてゐましたが、敏郎は遂に答へませんでした。

暫く考へてゐましたが、ふと氣を變えて、

「その話はこの次に來た時にするから、その時にしてお呉れ。」

「何故ですかお父さん。話すと困るの？」

「いや、そんな事はないけれど、今は用事があるので、早く歸らなければならないが、その話をすると長くなるから、してゐられないんだよ。」

明は吃驚して、

「お父さん、今來たばかりじやありませんか。

もう歸るのですか。」
「あゝ、だけど明お父さんと一緒に、その邊り迄行かないか。
欲しい物があれば、何でも買つて上げるよ。」
さう言はれると、明は今更の樣に、
「僕ね　お父さん、學校を餘り長く休んだから、困つてゐるんですよ。
二年生になれないかも知れないから……。」
敏郎は慈しみ深い眼で、明を見やり乍ら、
「そんな事は心配しないでもいゝ、お母さんがもうすつかりよくなつたから、退院すると、今迄ゐた家より綺麗で大きくて、便利のよい家へ入つて、お父さんもお母さんもおばあさんも、一緒に住むんだよ。
そして今度は町の學校へ行くんだよ。
田舍の學校とは違つて、町の學校には、却々よく出來る生徒がゐるから、明は負けない樣にしつかり勉强して、町の學校の級長になれる樣な、いゝ成績を取つてお呉れ。」

「本當ですか、お父さん。
それなら僕本當に嬉しいよ。町へ來たつて、決して誰にも負けません。
屹度級長になつて見せるよ。」
と明は顏に包み切れない喜びを湛えて言ひました。
敏郎は微笑んで、
「それでは明、これから入る町の學校を、お父さんと二人で見に行かうぢやないか。」
「お父さん、本當につれて行つて下さるのですか。
お母さん、お父さんにつれて行つて貰つてもいゝでせう。」
「えゝ、よろしいとも。つれて行つて頂きなさい。
でも貴方よろしいでせうか。」
とき江も口を添へて、
「何か今日は、用事があると仰有つたではありませんか。」
「いゝえ　それは後でいゝのです。一寸學校の邊りへつれて行つて來ます。」

と二人は喜び勇んで出かけました。
智恵子は明に、この間敏郎が買つて來た、新しい服を着せ帽子を冠せ、外套を着せると、我子乍らその凛々しさに、思はず微笑まないではゐられませんでした。
明は母と祖母に玄關迄送つて貰ひ、靴を穿きました。
「では　お母さん、お祖母さん、行つて來ます。」
智恵子は蹲いて、
「行つてゐらつしやい。今日はお父様につれて行つて頂いて、いゝ事ですね。」
「本當にあの嬉しさうな顔はどうです。」
二人はその後姿を見送つて微笑みました。
敏郎は滿足さうに、
「心配しなくてもいゝですよ。直きにつれて歸ります。
多少時間がかゝつても、決して心配しないで下さい。」
と明の手を取つて、表へ出ました。

父の家

病院の表へ出てから、自動車を呼ぶと、
「車で行かうよ。ねえ明。」
明は吃驚して、
「お父さん、自動車で行くんですつて？　そんなに遠いんですか。」
「いゝや、そんなに遠くはないけれど、自動車で行かうよ。」
明は父にさう言はれると、嬉しさに胸躍らせ乍ら、父と並んで、得意になつて乘込み、あちこち張りのある目で眺めてゐます。
自動車は命ぜられるまゝに、町の小學校の方へ走つて行きました。
軈てその門の前に止ると、

「明、この學校へ入るんだよ。」
明は吃驚して、
「お父さん、大きな學校ですね。僕これから、この學校へ來るんですか。」
「さうだ。こゝへ通ふんだ。いゝだらう。」
「本當なら、僕嬉しいなあ。學校も大きいし、運動場も廣いし……。」
「先生も大勢ゐらつしやるし、生徒も千人の餘もゐるんだぞ。
自動車から下りて見やうか。」
二人は自動車から下りて、暫く學校の樣子を見ました。
軈て明が滿足しただらうと思ふ頃、
「明、自動車に乘らうよ。」
「お父さん、すぐに病院へ歸るのですか。」
「まだ早いから、少しお父さんと遊んで行かうよ。」
「何處へ行くの？」

「いゝ所へ伴れてつて上げるよ。お前默つてついてお出でよ。いゝか。」
敏郎が行先を命じると、自動車はすぐに走り出しました。

祖母と孫

町へ行くかと思ふと、山や野を越えて、自動車は、一時間餘りも走りました。
そして大きな櫻堤を越えると、又町へ入りました。
明は父と一緒だから、安心はしてゐるものゝ、不思議でなりませんでした。
軈て山の手の、がつしりした門のある、三つも白い藏の建つた、家の前へ止りました。
高塀で圍まれた庭の中からは、大きな松や美しい庭木が、屋根より高く伸びてゐます。

それこそ殿様の家かと思ふ様な屋敷構です。
「さあ　明、こゝで下りるんだよ。
君歸り迄、一時間か二時間、町の菊屋で休んでゐて呉れ。」
と運轉手に敏郎が命じると、二人を下した自動車は、町の方へ走つて行きました。
明は何が何だか、さつぱり様子が分らないので、
「お父さん、こゝはどこですか。」
敏郎は笑つて、
「明これは、お父さんのうちだよ。
だからお前のうちなんだよ。」
明は目を瞠つて、
「僕のうちですつて？　これが？」
「さうだ。お父さんのうちだから、明のうちなんだ。だがね、明、
うちの中には、お前がお父さんの本當の子だつていふ事が分ると、餘り喜ばない小

母さんがゐるんだ。
だからうちの中へ入つて、小母さんがゐたら、お父さんの事を、小父さんていふんだよ。いゝかい。そしておばあさんと同じ位の人がゐるが、その人はお父さんのお母さんだから、お前には本當のお祖母さんだ。
だからおばあさんと言つて呼んでもいゝんだよ。
分つたかい。」
明は變な顔をして、
「僕何だか解らないけれど、お父さんの事を小父さんと言ひますよ。」
「さうだ〳〵それでいゝんだ。」
かうした話しをしておいて、敏郎は何食はぬ顔で、明をつれて家の中へ入りました。
その姿を見ると、
「あら　旦那様、お歸りなさいませ。」
それは三十位の年増の女中でした。

それを聞くと奥から、六つばかりの男の子と、四つばかりの女の子が飛出して來て、
「お父様、お歸りなさい。」
「お父ちやま、お歸り。」
と言ひましたが、傍に明がゐるので、變な顔をしてゐます。
「澄夫、お母様はゐるかい。」
「うん、座敷にゐるよ。」
「旦那様、只今奥様をお呼び致します。
まあ　お可愛らしい。この坊ちやまは、どちらのお子様でございますか。」
「これか、これは親戚の子だよ。」
と敏郎は簡單に答へました。
「お母様は？」
「御隱居様は、お部屋にお出でゝございます。」
「さうか。では明　お出で。」

女中は變な顔をして、
「あの奥様をお呼び致しませうか。」
「いゝよ、別に用はないから……。」
と言つて、そのまゝ明を伴れて、母の幾代の部屋へ入つて參りました。
「お母様、只今歸りました。」
と障子を開けて入ると、いつにない我子の元氣な顔、力のある聲に、幾代は吃驚して、讀みかけてゐた書物から、目を離して振向くと、
「おゝ　お前かえ、今日は早かつたね。
そんなに用事が早くすんだの？」
「用事が別に早くすんだ譯ではないのですが、今日はお母様に、是非逢はせ度い子供をつれて來たのです。
明、こちらへお入り。お前のお祖母様だよ。御挨拶なさい。」
父に促されると、明は自分で外套を脱ぎ、帽子を取つて、傍におくと、きちんと

坐つて、
「お祖母さん、御免下さい。
僕　明です。」
突然に見た事のない、可愛いゝ子供から、お祖母さんと挨拶されたので、幾代は面食つて、
「敏郎、一體この子は何處の子です。」
と訊ねました。
「お母さん、この子を見て、氣がおつきになりませんか。
これは智惠子が生んだ、明といふ私の子です。」
幾代は反り返らんばかりに驚いて、
「何ですつて？　智惠子の生んだお前の子？
智惠子は何時何處で、この子を生んだのでせう。
さう言へばこの子は、お前にも智惠子にもよく似てゐるよ。

何て可愛らしい子だらう。私にはさつぱり事情が分らない。
本當の事を聞かせてお呉れ。
お前は智惠子の行方が分らぬ〳〵と言つて、私に隱してゐて、何處かに智惠子に家を持たせて、この子を育てさせてゐたのかえ。」
「お母さん、今は何も彼も隱さずにお話致します。
どうか眞心になつて、聞いて下さい。」
と前置きをして、敏郎は今迄の出來事を殘らず母に打明けました。
初めの中は、妙に固くなつてゐた幾代も、段々感激して、袖で涙を拭ひ初めました。
勿論語つてゐる敏郎は、幾度ハンカチで涙を拭いたか知れません。
初めから默つて、父と祖母との話を聞いてゐた明も、幼い乍ら聰明なだけに、悲しさが胸に迫つて、大粒の涙をはら〳〵とその目から落してゐました。
話が終ると、幾代は堪り兼ねて、
「おゝ　さうだつたか。こんな可愛いゝ子が出來てゐたのか。

坊や、許してお呉れ。お祖母さんが意地悪だつたばかりに、優しいお母さんや可愛いゝお前に、永い間そんな可愛さうな思をさせてすまなかつた。

お祖母さんも今では、心から後悔して、お前のお母さんに逢つて、お詫びし度いと思つてゐました。

お祖母さんは、お母さんの事を心配して、どうしてゐるかと忘れた事はなかつた。それにしてもお母さんが、お前の様な可愛いゝ子を生んで、育てゝ見えるとは夢にも知らなかつたが、よくお祖母様が、かうして生きてゐる中に、訪ねて來て呉れた。どれお祖母様に一度、抱かれて見てお呉れ。」

明は嬉しいけれど、何だか恥づかしい様な氣がして、きまり惡氣に、父の顔を眺めると、

「明　お祖母様が、抱いて上げると仰有るから、抱かれて御覽。

恥づかしいものか。見てゐるのは、お父さんばかりだ。さ早く。」

父に促がされると、明は立つて祖母の膝に抱かれました。

幾代の懺悔

幾代は嬉しさに堪え兼ねたらしく、

「まあこの子は、とても丈夫で大きいから、抱くとお祖母様が、負ける位だよ。

何てお前はいゝ子だらう。

こんな可愛いゝ子がある事を知らずにゐるなんて、何といふ馬鹿なお祖母さんだらう。」

幾代はどうして自分の嬉しさを、言ひ現してよいか、といふ様な風に、明を抱きその頭を撫でて喜びました。

「お母さん、何かの事は又後で御相談し度いと思ひますから、よくお考へおき下さい。」

と敏郎が言ふと、幾代は

「私も昔の私じやなし、秀子の性質も、總ての事も全部解つて、このまゝで行けばうちが立行かないといふ事も、よく承知してゐるから、あんな事情で出て行つた智恵子に又歸つて呉れといふのは、勝手過ぎるかも知れないが、若し智恵子の居所が分つたら、私は一度逢つて一切の事を懺悔して詫びやう。

さうして若し智恵子が歸つて呉れたら、入つて貰はうと思つてゐるんです。

殊にこんな可愛いゝ子迄ある事が分れば、今日にもこの子をつれて、智恵子にこの家へ歸つて貰ひ度いんだよ。」

「お母さん、そんな簡單な譯には參りません。

秀子といふものがあり、二人の子供もありますし、世間態といふ事もありますから。」

「勿論それは分つてゐるけれど、家の大事には代られないからね。」

敏郎は苦笑して、

「お母さんは、いつも極端から極端へお考へになるから、取返しのつかない事が出來るのですよ。」

「だつて前はさうだつたけれど、今では全く私も心が變つて、智恵子に濟まないといふ事だけ思つて、心で詫びてゐるのだから、居所さえ分れば、すぐに歸つて貰つて、今迄のお詫びもし、償ひもし度いのが、僞りのない私の心なんだよ。」

「そんな事を輕はづみにお考へになつたり、仰有つたりすると、又大問題が起ります。智恵子は御承知の通りの精神の女ですから、今更名譽も地位も財産も望んではゐません。

だからあれの今日迄の厚意と苦勞に酬ゐるのには、生活の安定を保證してやればいいのです。

その代りこの子だけは、出來るなら、長男に入籍し度いんだけれど、智恵子の籍が入つてゐませんから、認知して庶子にしてなりと入籍しておいて、行末はこの家を相續させ度いと思ひます。」

「勿論だよ。この子と澄夫と比べたら、問題にならないんだから、こんなしつかりした子があるなら、名目や戸籍上は兎も角、眞實この家の長男だから、この子が相續す

るのが當り前だ。
坊や、お前はこの家の大黒柱だ。お父さんの後をしつかり繼いでお呉れよ。」
明は不思議さうに、
「僕この家へ來るんですか。」
「さうだよ。この家がお前のうちだもの、こゝへ歸つて來るのです。」
「お母さんや、おばあさんは？」
「お母さんもおばあさんも一緒に來て貰ふんだよ。」
「お母さん、餘り立入つた話は止めませう。この子の教育上よくありませんから。
兎に角今日は、智惠子の所へ返して來ます。」
「智惠子は、今齋藤病院にゐるんだね。」
「さうです。」
「私が訪ねて行つては惡いだらうか。」
「お母さんに今行つて頂いては、いけないかと思ひますから、もう暫く待つて下さい。

總ての事を處置して、これでよいといふ時に、私が御案内しますから……。」
「では智惠子をこの家に入れる事は、出來ないだらうかね。
秀子に東京へ歸つて貰つて……。」
「お母様、そんな非常識な事は出來ません。
秀子はあゝいふ、親にも夫にも嫁として、妻としての義務を盡す事を知らない女ですけれど、今は藤村家へ入籍し、二人の子供の母ですから、智惠子がこの家を去つたのとは、餘程立場が變つてゐます。」
「だつてお前、智惠子は默つて去つたけれど、荷物はそつくり殘して行つたから、そのまゝ倉に藏つてあるじやないか。」
「荷物の事などは、問題になりません。
資格が物を言ふ世の中ですから、今更何と言つた所で、取返しはつきません。」
「本當に飛んでもない事をして終つた。
私の心が邪であつたばつかりに……。」

と幾代は又も老の目から、涙をほろ〳〵とこぼしました。
「では餘り遲くなると、智恵子が心配しますし、秀子が氣付くと面倒ですから、今日は伴れて歸ります。」
「坊やをつれて歸るのかえ。折角お祖母さんの所へ來て呉れたのに。では坊や今度來る時は、大手を振つて歸つて來るんだよ。
お前の家だから、誰にも遠慮はいりません。」
明は默つてうなづきました。
幾代は立つて、箪笥の抽出しから、貯金の通ひを出して來て、
「坊や、お前にお小遣がやり度いけれど、お祖母さんは生憎今お金を持つてゐないから、この通帳を上げます。印鑑も一緒にあるから、持つて行つて、欲しいものがあつたら、出して頂いて買ひなさい。
お母さんにも好きな物を澤山買つて上げてお呉れ。」
明は當惑した樣に、父の顔を見上げました。

「さあ　明頂いておゝき。お祖母樣がお前に下さると仰有るのだから……。」
「お祖母さん、有りがたう。」
明はにこ〳〵として貯金帳と印鑑を受取りました。
「ではお祖母樣に御挨拶なさい。」
「お祖母さん、さやうなら。御機嫌よう。」
「ではもう歸るのかい。又直きにこの家へ歸つてお出で。」
明はそれには答へず、
「お祖母さん、今度來た時は、お祖母さんの肩を叩いて上げますから、待つてゐらつしやいね。」
「まあ　お前、そんな可愛いゝ事を言つて、肩なんか叩けるのかえ。」
「僕いつでもうちのお祖母さんの肩を叩いて上げるから上手ですよ。
この家へ來たら又、毎晩叩いて上げますよ。」
「さうかえ、それは有難う。何て可愛いゝんだらう。

敎へないのにこんな優しい事を言つて……。
矢張り智恵子の生んだ子だけあつて、違つた所があるよ。」
心が變れば、唯よい所ばかり思ひ出して、今は智恵子をのみ懷しむ幾代でした。
九年前に智恵子の長所をはつきり認めて呉れたなら、お互にこんな不幸な運命に飜弄されはしないのにと、敏郎は今更乍ら遺憾に思ふのでした。

「お客様でございます。」
ドアを開けて、看護婦がにつこりとして顔を出しました。
「さう、誰方ですか。お客様つて？」
と言つた時、

「御免下さい。」
と入つて來たのは、おゝ意外、それは忘れやうとしても、九年間忘れられなかつた、好美と秀子の二人でした。
智恵子の顔は眞蒼に變りました。
「あら？　智恵子さん、そんなに驚かないで下さいませ。」
「智恵子様お久しうございました。」
「まあ　誰方かと存じましたら、好美様と秀子様。
よくこそお出で下さいました。」
看護婦の手前、出來るだけ表情を和げて、智恵子は一應の挨拶をしました。
看護婦は變な客だと氣付いたのか、氣轉を利かして、
「お茶を入れて參ります。」
と外へ出て行きました。
看護婦の足音が消えると、好美は

「智恵子様、何うして貴女は九年前、子供迄出來てゐるのに、母にも兄にも告げずに家をお出になりましたの？

餘りじやありませんか。

あれから母だつて兄だつて、どんなに心配したか知れませんのよ。

幾らお實家のお母様が、お大事だからつて、それはひど過ぎやしませんか知ら？

緣づいた先の親や夫には、どんな恥をかゝせ、心配をかけても、自分の親さえ大切にすればいゝといふ樣な、それが日本婦人の德性と言はれるでせうか。

一體今迄何處に隱れてお出でになつたんですの？

今度大變な御病氣をなすつたんですつてね。

それ位な報いは、ありさうな事だと思ひますわ。あんなに兄や母を苦しめたんですもの。

幸ひ秀子さんが、貴女に代つて、來て下すつたから、助かつた樣なものゝ、さうでなかつたら、私の家は今頃、どんな事になつてゐたか、分らないと思ふと、思ひ出しても涙が出ますわ。

それにしても貴女は、おとなしく見せてゐて、隨分性根がしつかりしてゐるんですね。

今になつてから、お兄樣をうまく籠絡して、坊やを母に逢はせたりして、老先の短い母に餘計な苦勞をさせるなんて……

それが貴女、女の道だと思つてゐらつしやいますの？

そんな變な事をして、折角平和な家庭を攪亂して、子供の二人もあるお姉樣を離緣させて、坊やをつれて、今頃藤村の家へ乘込むおつもりですか。

それでその準備として、坊やを兄につれさせて、お母樣に逢せたりなどなすつたのでせう。」

智恵子は眞蒼になつて、

「まあ、貴女は何を仰有いますの？　決して私そんな事は致しません。

坊やがお母樣にお目にかゝりに行きましたなんて、そんな事……。」

「まあ　分り切つてゐる事を白ばくれて、どうしてそんなにお隠しになるのですの？
現に私母からちやんと聞きましたよ。
殊にこゝにゐらつしやるお姉様が、一切の事を聞いてお終ひになつたんですのに。
それでも知らないと仰有るのですか。」
「私は全く存じません。
先達旦那様がお出でになりまして、一寸その邊り迄遊びにつれて行くと仰有つて三
四時間たつてから、伴れてお歸り下さいましたけれど　敏郎さんからも、子供からも
そんな話は聞きません。
本當に今初めて伺つて、變な事だと思ひます。
子供にも一度確めて見ますが、今度旦那様がお出で下さいましたら、詳しい事情を
伺つて見ます。」
「智恵子さん、貴女は兄さんの事を、旦那様だなんて、自分の夫の様に仰有いますけ
れど、お兄様は昔は兎も角も今は貴女の夫じやありません。

歴とした奥様であるお姉様と、二人の子供迄あるのですよ。
少しお言葉に氣をつけて下さい。」
「すみません。つい言ひ馴れた言葉ですので……。」
「智恵子さん、一體この先貴女は、どうするおつもりですか。
本當の心持を聞かせて下さい。」
「私の心持と仰有いますと？」
「坊やをつれて、藤村の家へ乗込んで、子迄ある正妻のお姉様を、離縁するといふ様
なお考へなんですか。」
智恵子は呆れて、
「飛んでもない。貴女は何といふ事を仰有いますの？
今更私にどうして、そんなつもりがございませう。
そんな事をする位なら、九年前にお母様や旦那様に無斷で、家出なんか致しません。」
「では貴女は、これから先どうなさるのですか。

藤村の家へ歸らないと言へば、別に家でも建てゝ、其處で名義は兎に角、眞實は本妻格でお姉様から兄を奪つて、二人の仲に出來た子供を大きくして、藤村家の財産を乘取るおつもりですの？」

「まあ　好美様、どうしてそんなに、私の事をひどく仰有いますの？

私ははつきり申上ます。奥様、いゝえ秀子様　好美様。

御安心下さいませ。假令二人の仲に子供はありましても、藤村家へ入籍させて頂いては居りませんので、子供は私一人の子になつてゐます。

それに九年前、あゝした決心をして、藤村家を去るのには、去らねばならない事情があつたからです。

それは貴女が一番よく御承知の事と思ひます。

その事について、あれこれと申しますと、お互に氣持を惡く致しますから、私は何も申しません。

却つて私の前生からの罪を滅して頂くために、貴女方に御試練して頂いたと思ひまして、今では心から感謝して居るのでございます。

だから今更貴女方が、私の事を誤解して、何と仰有つても、事實が總てを證明致しますから、別に進んで言譯なんか致しませんが、貴女方が御心配になつてゐらつしやる様な事は、私毛頭考へて居りません」

「却々しつかりした事を仰有いますわね。

それなら何うして今頃、兄にお逢になつて、こんな苦勞をおかけになりますの？」

「その事なら申上げます。

私は一生涯且那様に、お目にかゝらぬ決心でゐましたけれど、目に見えぬ神様が、お兄様を私の所へお導き下さいましたのですわ。

若し御不滿がありましたら、私の住んでゐました村の氏神様に仰有つて下さいませ。
私達が再會したのも、お兄様と子供が、不思議に名乘り合つたのも、皆氏神様のお引合せでございます。」
「變なお話ですけれど、貴女がさう仰有ればさうしておきませう。
けれどもこの先、どうなさるおつもりですの？
家庭生活に倦怠を來してゐる、私儘な兄や、少し老耄して、物の道理や判斷の出來なくなつた母を籠絡して、藤村家を横領しやうなんていふ、怖ろしいお芝居は、遠慮して頂き度いんですの。」
「飛んでもない。私がそんな女に見えませうか。
尤も見る人の心に依つて違ひますから、貴女にはそんなに見えますかも分りませんが、どうぞ御安心下さいませ。
智惠子は之でも日本女性でございます。
決して天道に反した道は踏みません。

今日迄は不思議な毒きぬ緣で、且那様に大變御厄介をかけましたけれど、今は全く元の體になりましたから、自活の道を立てゝ參ります。」
「自活の道ですつて？　それは貴女自身で働くといふ事なのですか。」
「左様でございます。
今迄も自分の力で、母と子を養つて參りましたから、これからだつて、誰方の御厄介にもならないで、自分の力で親子三人で生きて行ける自信がございますから、決してこの上且那様の御厄介になつたり、御費用を出して頂かうなどゝは、毛頭考へては居りませんから、御安心下さいませ。」
「さうしたお口先は結構ですけれど、兄をお姉様から奪つて、もとの生活を復活させやうといふお考へだけは事實でせう。」
「若しかそんなだつたらどうなるんでせう。」
「若しそんな怖しい考へが、貴女にあつたら、貴女の怖ろしい心の刃に刺されて、一命を終る人が、一人や二人屹度出來る事を、前から覺悟して頂き度いのです。」

智恵子は笑つて、
「そんな御心配は、御無用でございませう。私がどんな女であるか、もう暫く眺めてゐて下さいませ。」
「御自分で處置なさると仰有るのですか。」
「其處迄はお尋ねにならないで下さいませ。私にも考へがあります。では唯一言だけ申上げておきます。私がどんなに心の間違つた女かと、お憎しみになりお疑ひになる事は、貴女様の御自由でございますけれど、私と致しましては、假令お暇頂いても、一度は御因縁があつて、嫁として御厄介になりました藤村家です。お母様も大切であり、且那様も大切です。藤村家が圓滿に幸福に、代々お榮えになります様にと、心からお祈りして居ります以外に、別な心は毛頭ございません。
まして、如何なる事がありませうとも、今日になりましてから、昔の事を口實にし

て、藤村家に、因縁をつけお世話を受けやうなどといふ事は、夢更考へては居りません。
この事だけははつきりお誓ひ申上げておきます。
奥様、いゝえ　秀子様、どうか御安心下さいませ。」
好美が次から次へと、鋭い刄の様な言葉で智恵子に挑みかゝつて行くのを、はらはらし乍ら聞いてゐた秀子は、智恵子の言葉を聞くとほつと安心して、
「智恵子様、突然お伺ひ致しまして、今の様な事を好美さんが仰有つてすみません。どうぞお氣を惡くなさらないで下さいませ。
以前は兎も角、今では二人も子供がございますので、若しかの事があつたらと、女心の淺間しさに、はしたなく好美さんの所へ、お知らせしましたものですから、東京から飛んで來て下さいました。
直接貴女にお目にかゝつて、事情を伺つて見るから、一緒に行かうと仰有るので、分別もなく御一緒に伺つたのでございました。

本當にすみません。どうぞお氣を惡くなさらないで下さいませ。」
「いゝえ　それどころではございません。
私こそ大變貴女に御心配かけまして、申譯もございません。
私の決心は今申しました通りでございますから、どうか御安心下さいまして、段々御老體におなりになりましたお母様に、御孝行をお盡しになつて上げて下さいませ。
そして旦那様　いゝえ又失禮な事申しましてすみません。
敏郎さんにも、出來るだけ御親切にして上げて下さいまして、一生御圓滿にお過し下さいます様に、私からもお願ひ申上ます。
こんな事を私などが申上げては失禮でございますけれど……。」
「いゝえ、よく仰有つて下さいました。
私が貴女程行き屆かないものですから、主人は始終不滿もありませうけれど、二人も子供が出來てゐるのでございますから……。」
「本當にさうでございます。

お二方が御圓滿であれば、お子様方もお仕合せでございますから、どうか貴女様も出來るだけ眞心を盡して上げて下さいまして、一生御圓滿で、御幸福にお暮し下さいます様にお願ひ致します。」
秀子は智惠子の言葉を聞くと、眞底から安心して、懷から帛紗を取出して、中から幾らかの札束を取つて差出し、
「これは僅かですけれど、坊ちやんの教育費の一部にでも足して頂きます様に。」
智惠子は吃驚して押返し
「貴女のお志は有りがたくお受け致しますが、このお金だけは頂く譯には參りません。」
「あら？　何故でございませうか。」
「子供の教育は母の義務でございます。
私の信念が、絶對に人様の御援助を仰ぐ事を許しませんので、折角の思召でございますが御辭退致します。」

好美はいきなり、

「一口に言へば、三千圓だけれど、貧しい暮しをする人には、得難い大金よ。まさかの時の役に立つでせうから、折角のお姉様の厚意を無にしないで、頂いておいたら如何ですの？」

「折角の御厚意はお受けしますけれど、假令三千圓でも一萬圓でも、筋の通らないお金は御辭退致します。

一生子供の前に頭の上らない様な、愚かな母になり度くはございませんから……。」

「ではお姉様、持つてお歸りなさいよ。

だつていらないといふのに、無理に置いて行く必要はありませんから。

では　智恵子さん、突然伺ひまして、失禮な事ばかり申上げてすみませんでしたけれど、これが私の性分ですから許して下さいね。

ではお姉様、歸らして頂きませうよ。」

好美はろく〳〵智恵子に挨拶もせず、お金の處置をどうしやうかと、もち〳〵して

ゐる秀子の前もかまはず、いきなり横からそのお金を掴んで、自分のハンドバックに入れると、秀子を促して、早々に出て行きました。

餘りの事に、智恵子は見送る氣にもなれず、室の入口で、

「では失禮致します。御機嫌よう。」と送り出しました。

「左様なら　御機嫌よく、お大切に。」

流石に秀子はにつこりと、後を振返つて、お辭儀をして歸つて行きました。

そして病院の玄關を出ると、待たせてあつた自動車に乗りました。

二人は病院の門を離れると、驀らに町の中を走りました。

好美は秀子を振返つて、

「どう、旨くいつたでせう。」
「だつて貴女、あれじや、餘りひど過ぎるわ。
私はら〳〵してゐましたのよ。」
「だつてあの場合、あゝいふ風に高壓的に出ないと駄目なのよ。
若し同情して、こちらが優しくでも出やうものなら、何を言ひ出すか知れやしないのよ。
だつて考へても御覽なさい。
今迄だつて、お姉様から離れ勝ちな兄が、智惠子さんとの仲が復活すれば、全く智惠子さんに獨占されて終ふじやないの？
それに以前と違つて、母も事毎に貴女の事を感情に障へて、今に藤村家は潰れて終ふと、口癖の様に愚痴を言つて、智惠子を出したのは、一生の誤りだつたと、逢ふ人毎に懺悔話をしてゐるんですもの。
餘程老耄して終つて、私の言ふ事だつて、もうちつとも聞かないで、お前なんかの

言ふ事は駄目だつて、一言で斥けるんですよ。
尤も私もよくないんだけれど、川合の放蕩費迄、うちへねだりに來るんだから、母や兄に愛想づかされるのも、無理はないと思ふけれど……。
それでも藤村家で生血をこぼした、たつた一人の娘の事だもの。
少し位な我儘は、聞いて呉れたつていゝわね。」
「さういふ風に思つてゐれば、世話はないんだけれど、餘り始終の事だから、お母様もお兄様も怖がつて、貴女がゐらつしやると、又かと思つて、嬉しいより怖しさが先に立つゝて、仰有つてますよ。」
「驚いたわね。眞實の親や兄の甲斐もない。
一そ見せしめに、私三原山へでも行つて、噴火口へ入つて終ひませうか。」
「そんな事冗談にも仰有るものじやないわ。
そして貴女も少し、年と相談して考へなけりやいけませんのよ。
見込がないと思つたら、餘りひどい事にならない中に、別れてお終ひなすつた方が

いゝじやないこと？」
「御親切は有難いけれど、鎖縁とでもいふのですか、苦しめられ乍ら、離れられないのが因果なの。仕方がないわねえ。」
「だつて貴女は、お母様や兄様から貰いで貰ふだけじやなく、私からだけでも、二萬圓以上御融通してゐますわ。」
「よく承知してゐます。充分恩に被てゐますわよ。
だけど貴女から、こんな風に言はれると、いゝ氣持はしないのよ。
貴女だつて隨分派手な生活をしてゐるんじやない？
東京へだつて、毎月位やつて來るし、母が言つてゐましたわ。
秀子はこんな田舍の野菜や、まづい魚ばかり食べてゐては、生きてゐられないと言つて、東京から終始珍らしい物を取つたり、罐詰や魚などを取寄せて食べるし、朝寢はするし、宵寢はするし、箒や雑巾は手に取つた事がないし、お勝手へ行つて火を焚いた事もない。

全くの女中委せで、親戚が來たつて、近所の人が來たつて、お愛想を言ふじやなし又もてなすじやなし、私にだつて、優しくお母様と言つて呉れた事もない。
月日が立つに從つて、段々押しは強くなるし、薄情にはなるし、贅澤は激しくなるといふ有様だから、これではうちの身代も永くは保たない。
なんて泣いてゐましたよ。」
「まあ本當？　お母様そんな事を言つてゐらつしやるの？
だつて私、藤村へ來てから、まだ一回だつて、お兄さんからだつて、お母様からだつて、拾圓のお小遣も頂いてゐないんだもの。
そんな事を言はれる理由はないわ。」
「だつて十萬圓のお金を、お土産だつて言つて持つて來たけれど、全部自分の小遣に使つて終つたじやないの？」
「あら　ひどいわ。あの時貴女に一萬圓、叔父様に一萬圓現金で上げたし、それから九年の間に、貴女はお母様や兄様に内緒だつて、二萬圓も持つて行つたじやないの？

私が十萬圓使つたなんて、當らないわ。
それにまだ私二萬圓餘り持つてゐるんですもの。」
「僅か八年や九年の間に、女の小遣に三萬圓も四萬圓も使ふのは、少し酷過ぎるわ。
だからお母さんは、これから先を案じるつていふのよ。
だけどお母様だつて、もう耄碌しちやつたから、永い事はないのよ。
だから貴女少し上手に立廻つて、世帶持上手な女に化けて、お母さんを喜ばせて呉れるといゝのよ。」
「私自分では精一杯やつてゐるつもりだけれど、お母さんに一切合切氣に入らないんだものしやうがないのよ。
此の頃じやとても露骨に、智惠子がゐたら〳〵つて、人毎に私に當てつけがましく言はれるものだから、全く困つて終ふのよ。
それにお兄様が理解あればいゝけれど、あんな調子で、一べんだつて、妻らしく言葉もかけて呉れず、子供だつて自分の子なのに、抱いた事もないんですもの。

一體どういふ人でせう。
私全く見損つたわ。こんな事なら貴女に侑められて、智惠子さんの後へなんか、來るんじやなかつたと、泌々後悔してゐるのよ。」
「そんなに後悔してるなら、離緣して歸つたらどう？
そしたら兄も喜ぶし、智惠子さんも喜んで復緣するわよ。」
「そんな事が今更出來るものですか。
二人も子供迄ある仲を……。」
「それ御覽なさい。何とか體裁のいゝ事を言つてるけれど、矢張り兄さんを愛してゐるからじやない？」
「矢張り鎖り緣で、思ひ切れないのが因果ですわね。」
「兎に角このお金、智惠子さんにやつたと思つて、私に頂戴ね。
今必要な事があつて困つてゐるんだから……。」
秀子は顏色を變へて、

「あら？　それはひどいわ。」
「でも智恵子さんに上げるつもりで持つて行つたんだから、上げたと思へばいゝじやないの？」
「受取らないものを、上げたなんて思はれますか。」
「分らないのねえ　貴女、それだつたら、私にお禮だと思つて頂戴。
重大問題を一期に解決したのは、私じやない？
將來の幸福の障碍を、きつぱり除いて上げたんですもの。
これ位は默つてゐても呉れるのが當り前よ。
それに私のハンドバックへ、既に入つて終つてゐるんですもの。」

波打つ孤島

風光明眉な瀬戸内海の、小さな人無き孤島に、小舟を漕ぎつけ、舟夫を岸邊に憩はせて、敏郎と智恵子は、島の頂きに上つて參りました。
空はよく晴れて、本州の山々、四國の山々が、繪の様に見えます。
さうした美しい海の中に、無數の大小の島が浮いて、何とも言ひ様のない、絶景に二人は暫し恍惚として、
「何て奇麗な景色でせう。まるで夢の國に來た様ですわ。」
「素晴らしいだらう。だからこゝへ誘つたんだよ。」
「貴方　どうしてこんな所を、知つてゐらつしやいますの？」
「私はお前がゐなくなつてから、隨分煩悶した。
それを解決しやうと思つて、色々な土地を選んで、歩いて見たが、絶對に駄目だつた。
其處で一人限りの世界で考へて見度いと思つて、ふと思ひついて、小舟を雇つてこゝへ漕ぎつけて貰つて、朝から晩迄考へてゐる中に、漸く解決がついたんだ。」
「解決がついたと仰有いますと？」

「これは皆天命だ。だから藻掻かずに、自然に生きて行かなければならない。といふ信念が出來たんだ。」

「結構でございましたわね。」

「だけど私は正直に言ふと、その當時餘り煩悶したので、神經衰弱に罹つてゐたから、判斷力が鈍つて、この世が厭に感じられたのだつた。

それで人知れず、この世から身を隱し度いといふ樣な、變な心持になつてゐたので、危くすると、海に身を躍せ度い樣な衝動も、時々起つたけれども、その瞬間この世の何處かにお前が生きてゐる。

さうして私の幸福を祈つてゐて呉れる。

と感じたら、ふと生きてゐるといふ事に、興味を感じ出して、力を得て家に歸つた。

それでこの島へお前を伴れて來たんだ。」

智惠子は目を瞠つて、

「まあさうでしたの。何故あんな小舟なんか雇つて、こんな孤島へ行くなどゝ仰有るのかと、不思議に思つて居りましたが……。」

「九年前は一人來たのだつたが、今日はお前と二人で來られた事を思ふと、目に見えぬ不思議な力が、私達を繫ぎ合せてゐる樣に感じられてならないんだよ。」

「本當に何も彼も不思議でございます。」

と言ひ乍ら、二人は其處に腰を下しました。

「智惠子、病院で話をすると、お母さんも明も看護婦もゐるので、心の儘に話も出來ない。

だから誰も二人の感情を妨げる者のない、この孤島を選んで來たのだが、今日はお前によく相談し度い事があるんだ。」

「どんな事でございますの？」

「外ではないが、過去の事はお互に色々な運命に襲はれて、心にもない道を、淋しく歩いて來たんだけれど、これに依つて、お互に自己の生命を幸福に生かすためには、何が必要であるかといふ事が、よく解つたと思ふ。

だからこの體驗を土臺にして、これから先は間違ひのない、正しい道を開いて、意義ある生活をし度いと思ふのだ。

殊に前と違つて、お母様の心が全然變つて、今ではお前に對して取つた態度行について、深く懺悔して居られる。

そして、智惠子さへ藤村家へ歸つて呉れたら、何時生命が終つても、安心して大往生が出來る。

このまゝ秀子に委せておいては、今にも藤村の家が全滅する樣に思はれて、寢ても眠られないと言つて居られる。

それ位だから、お前が世間や親戚への手前、秀子への義理といふ樣な考へを持たずに、藤村家へ歸つて呉れると言へば、秀子は實家へ歸してもいゝ。

母もその決心でゐるんだ。」

「まあ、そんなお可哀さうな事が出來ますか。

お可愛いゝ、二人のお子達迄あるものを……。」

「お前はさういふけれど、因果應報といふ事がある。

秀子はお前が私の妻である事を知つてゐて、しかも二人が睦じく暮してゐる事を承知しながら、好美を手先に使つて、母や叔父迄動かして、遂にお前に毒杯を盛つて、藤村の家から去らしめたじやないか。

そして自分は何喰はぬ顏をして、拾萬圓の土產金を持つた嫁だといふ、大袈裟なふれ込みで、世間を騷がせ、藤村の家へ乘込んでから今日迄何をしてゐたか。

お前は二人の子供があるといふけれど、それは決して秀子との間に、夫婦としての愛情があつて出來た子供ではない。

かう言ふと變に聞えるだらうが、秀子を塵程も愛してゐないけれど、どうした因緣に依つてか、假令形式でも、自分の妻として、眞面目で輿入れして來た心持を思ふと、折々は、可哀さうな女。といふ感情から、眞の愛情もなく、夫婦生活を行つたといふだけの事なのだ。

それがために、血を分けた父として、人には言はれない事だけれども、二人の子供

に對しても明に對する樣な愛情は、十分の一も感じる事が出來ないのだ。實に怖ろしいものだと、自分乍ら泌々感じてゐるんだよ。

こんな僞つた、矛盾した不幸を、過去は兎も角、今から後に於ては一日だつて私には出來ない。

又する必要がないと思ふ。

だからその事を、お前とよく相談して、お前の心持を聞いて見た上で、最善の處置を取らうと思ふのだ。

母も智惠子がこの家へ歸つて呉れるとさへ言へば、決して智惠子が親戚や世間から非難されない樣に、總ての責任は自分が負ふと言つてゐられるのだよ。」

「まあ　貴方、それでは今の奥樣を御離緣なすつて、私を藤村の家へ歸らせ度いと仰有るのですか。」

「さうだ。それより外に方法はないと思ふ。」

「そんな事は出來ませんわ。

それでは奥樣がお可哀さうです。

假令お母樣や貴方が、どんなに仰有つて下すつたとしても、今更奥樣を御離緣なすつたその後へ直るなんて、私そんな心にはなれません。」

「だつてお前、秀子はお前の地位を奪つた女じやないか。

だから奪はれた幸福を、奪ひ返すのは當然じやないか。」

「私にはそんな怖ろしい事は、とても出來ませんわ。」

「では母や僕がどんなに苦んでも、お前はかまはないといふのか。」

「そんな譯ではございませんけれど、貴方は一圖に奥樣を、愛さないと決心してゐらつしやるから、御自分から御不幸になるのですわ。

お心持をすつかりお變へになつて、貴方が眞實の眞心で、親切にしてお上げになれば、屹度愛する事が出來る樣におなりになれますわ。」

「そんな事が出來るものか。

それは私も八年間だけは、何とかして秀子を一度でもいゝから、眞から愛して見度

いと努めて見たが、全然駄目だつた。

それがいつぞや、たけに逢つて、總ての事を知つてからは、秀子が自分の幸福を奪つた、惡魔の樣に思はれて、憎みといふよりも、一種の怖ろしさをさえ感じる樣になつたのだ。

これでは全く家庭生活の破壞だ。

こんな生活が今後假にも續けられるとしたならば、藤村の家は滅亡する外はないだらうと思つてゐた矢先、お前に再會出來たのだ。

全く神の力か、御先祖樣のお手引か、兎に角目に見えぬ偉大な力が、再會の導きをして下さつたのだと思ふと、私は堪らなく、敬虔な氣持になるんだ。

世間の體面などには、こだはつてはゐられない。

飽迄も藤村の家のため、自己の幸福を取戻すために、斷乎たる處置を執らうと思つてゐるのだ。

智惠子、この氣持が分つて呉れるだらうな。

お前としては、言ひ度い事が山程あるだらうが、明に免じて何も言はず、藤村のうちへ歸ると言つてお呉れ。賴む。」

敏郎はいきなり智惠子の手を執つて、固く握り乍ら、一生懸命で訴へる樣に、又嘆願する樣に言ひました。

固き決意を秘めて

智惠子は何と答へてよいか分らず、途方に暮れて、ぢつと俯向いて、地面を見凝めてゐましたが、軈て顏を上げて、

「貴方の仰有る事は、よく分りました。

ですけれども、今俄に何の罪科もない奥樣を、離緣するといふ樣な事をなさいましては、それこそ奥樣やお子樣を、お嘆かせになるだけでなく、世間を騷がせて、貴

方のこれ迄築いてお出でになつた、地位も信用も失つてお終ひになります。
私としても、さういふ容易ならぬ事情の、貴方のおうちへ眞面目で歸つて行くといふ事は、出來る道理がありません。
貴方も餘り極端にお考へにならないで、誰の心にも名譽にも地位にも傷つけないで、圓滿に解決出來る方法をお考へ下さいませ。」
「誰の幸福も奪はずに、圓滿に解決するといふと、どうすればいゝんだ。」
「その事なら方法はあると思ひます。
私は今迄も母と明を養ふために、弱い力でも小學校に勤めて參りまして、人樣の力にお縋りしないで生きて參りました體驗がございますから、今迄の生活を續けて行けば、大して不自由はないと思ひますが、貴方が明の事を思つて頂いて、どうしても始終面倒を見て下さるといふ思召でしたら、どこでも貴方の御都合のよい所へ、家を持たせて頂いて、お隙のあります時に、折々お出で下さる事にして頂けばよろしいではございませんか。」

「それではまるでお前が、日蔭者と言ふ樣な位置になつて、可哀さうじやないか。
そんな事は私として、到底忍びないんだ。」
「いゝえ　貴方、私はもとより名譽も地位も財寶も求めた事はございません。
ですからそんな御心配は少しもございません。
唯私が貴方の御保護の下に生活して、折々お目にかゝる事や、明を見て頂くといふ事が、貴方の本當の幸福でございますならば、私だつてこの上の仕合せはございません。」
「ではお前、當分別の家に日蔭の生活をして呉れてもいゝといふのかい。」
「はい、結構でございますわ。」
「さうか、よく言つて呉れた。
それでは或時期の來る迄、さうして辛抱してゐて呉れ。
その代り決してお前やお母さんや明の住む家として、住み惡い不便な家なんかに住ませはしない。

出來るだけ住み心地のよい家を捜して、住んで貰ふ事にしやうね。
そして生活の事も、決して不自由なんかはさせやしない。
假令お前が世間態には、日蔭の身になつてゐても、私としてはお前が正妻なんだし、明は純然たる長男なのだから、家の大切な財産等は、滅茶々々にならない中に、明の名義に書き代へる事にして、藤村の家の基礎を維持する事も出來るのだから……。
さうなれば母も喜ぶだらうし、私だつて安心なんだ。
それではさういふ風にする事に決めようね。」
「はい　結構でございます。
でも餘り極端な事をお考へにならない方がよろしうございますわ。」
「いや、大事な問題が、これですつかり解決がついたので、私はたまらなく嬉しいよ。
では後の話は又歸つてからゆつくりしよう。
そこでこゝに五百圓程お金を持つて來た。
家は私が捜して來るが、必要な世帶道具などは、お前がよく見て買つておくといゝ。

餘り安物を買ふと、後で後悔するから、簞笥茶棚長火鉢といふ樣な、始終使ふ道具は少々高くとも材料もよく、仕事も念の入つたのを買つておいて呉れ。
金は又足りないだけ上げるが、今はこれだけしかないから……。」
「こんなに頂いていゝでせうか。」
「いゝとも、こんな話になるのなら、もつと用意して來ればよかつたが……。」
「いゝえ、澤山でございます。」
智惠子は夫の手から受取つて、押し戴きました。
「ではもう遲くなるから歸らう。」
と敏郎に促されても、智惠子は何故か立たうともせず、
「もう少しこゝで遊んで參りませう。
折角來たんですもの。」
「だつてお前、話が決れば、こんな離れ小島にいつまでもゐたつて仕樣がない。
明もお母さんも、病院で待つてゐるんだから……。」

「でも人間の命なんて、老少不定と申しますもの……。」
「何を言ふのだ。智恵子。」
「例へば今日かうして、貴方と二人限りでこの島へ來て、樂しくお話して、今の樣なお約束もしましたけれど、明日とは言はず、今日の日にも、無常の風が吹けば、貴方の身にどんな事があるかも知れませんし、又私の身に異狀が起るかして、これ限りで永久のお別れにならないとは、誰が保證して呉れませう。
ですからもう少しお話して歸りませう。」
「何を言つてゐるんだい。
若い娘ではあるまいし、それにこんなに二人の幸福が、永久に續くといふ事が、約束されたからは、何もそんな感傷的な心持にならなくてもいゝではないか。」
それには答へずに、智恵子は遠い夢をでも追ふ樣に、じつと海の彼方を見てゐました。
「貴方、嚴島へ參りました頃は、二人共幸福でしたわね。」

「うむ、本當にさうだつた。
美しく月が輝いてゐる波打際を、二人で歩いて語り合つた。
その時お前は、日本中の幸福を一身に集めたと言つたね。」
「貴方は世界中の幸福を、二人で集めた樣だと仰有いましたわ。」
「あの時世界中の幸福を集め過ぎて終つたので、天魔に襲はれて、長い間その幸福を奪はれてゐたんだ。
だが、その奪はれた幸福が、又今日から二人の手に歸つて來たんじやないか。
智恵子、これからは又、多少境遇は變つても、世界中の幸福を、二人でいや親子三人で集めやうじやないか。」
「餘り集め過ぎると又奪はれますわ。
ねえ　貴方、私は誰にも奪はれない寶を、始終胸に抱きしめてゐ度うございますわ。」
「それは、何を意味するの？」
「この世はもとより、末の末の世迄も、貴方の大きな強い眞心を、私はしつかり胸に

抱いて行き度いのでございます。」
「そんな事は、言はなくとも、當然じやないか。」
「いゝえ　さうではありません。假令この後私の身にどんな事があつても、貴方は私を信じ愛して、少しも變らない眞心を、私の胸に與へてやると、誓つて頂き度いのですわ。」
「誓ふとも。假令どんな事があつても、よし天地が逆さまになつても、私の愛情には變りはないよ。
これだけは信じてお呉れ。」
「有りがたうございます。
私そのお言葉を聞いて、もうこれ以上の喜びはございません。
私も假令どんな事が生じまして、お懐しいお傍を去る樣な事がございましても、眞心は貴方に附添つて、貴方の胸の中で生かして頂きます事を、お忘れにならないで下さいませ。それだけお願ひ致しておきます。」

「お前の心持はよく分つてゐる。
二人は假令別れてゐても一緒にゐても、一心同體なんだ。
その力で今後不幸といふものを打拂つて、本當の幸福の明るい道を開いて行かうね智惠子、さあそれでは歸らう。」
夫に促されて、漸く智惠子は立上りましたが、それでも尙未練氣に、夫の顏を見凝め乍ら、
「私いつまでも、かうして何の障碍もない、貴方と二人だけの世界に生き度うございますわ。」
と言つて、何故かほろりと涙をこぼしました。

妻子よいづこ

敏郎は智惠子達を住ませるのに、最も適應しい、玄關構への高尙な、新築の家を、

山の手の静かな町に見付けましたので、それを借入れる事に家主と交渉し、
「兎に角一度家内をつれて來て見せます。
男ではお勝手の事などが分りませんから……。」
と意氣揚々として、病院へやつて參りました。
今日は吉日だから、退院する約束になつてゐたからです。
敏郎はいつもの様に、智恵子の病室のドアを開けました。
其處にはにこ〳〵として、自分を待つてゐて呉れるであらうと想像し期待してゐた
明や智恵子の顔は見えず、がらりとした空室になつてゐて、塵一つ殘つてゐません。
敏郎は驚いて、
「あ!! 部屋を違へたのかな」
と廊下へ出て見ると、掛札がかゝつてゐません。
隣を見ると、左が松田庄一、右が小野田洋子といふ札がかゝつてゐます。
「矢張りこの室なんだが、一體どうしたんだらう。」

と訝しく思つてゐると、知合の看護婦が其處へ來ましたので、
「一寸伺ひますが、篠原智恵子はどうしましたでせうか。」
看護婦は吃驚したらしく、
「あら 藤村さんでゐらつしやいますか。篠原さんは今朝御退院になりましたのでご
ざいますが……。」
敏郎は自分の耳を疑ふ様に、
「えゝつ!! 退院しましたつて?」
「はい、あのそれにつきまして、院長先生が貴方がお越しになりましたら、お目にか
ゝり度いと仰有つて、お待ちでございますから、どうぞあちらへお出で下さいませ。」
それを聞いて、敏郎は躍る胸を押へて、看護婦に案内され院長の部屋へ訪れて行く
と、院長は
「おゝ 藤村さん、さあどうぞこちらへ。」
と應接間へ招じました。

そして一應の挨拶がすむと、敏郎は
「誠にこの度は永い間、智恵子がお世話様になりまして、有りがたうございました。」
「いゝえ、御全快になりまして、何よりでございました。
一時は非常に危險な狀態でございましたが、御運がお強かつたので、早く御全快になりまして何よりでございました。」
「これも皆先生のお骨折りのお蔭でございます。誠に有りがたうございました。
それにつきましては、今日は大變日がよいので、退院させて頂く事に致しまして、迎へに出ましたところ、既に退院しましたとの事でございますが、一體何處へ行つたのでございませう。」
「私も本當の御事情は存じませんが、今朝奥様がこゝへお出でになりまして、色々とお禮など仰有いまして、退院する事になつたが、一寸急ぐために、貴方にお目にかゝる暇がないから、後程お出でになつたら、貴方にこの手紙を渡して下さいと仰有つて、預けておいて御退院になりました。」

敏郎の顔は眞蒼に變りました。
「それは何時頃でしたでせうか。」
「私が來るとすぐでしたから、確か十時頃だつたと思ひます。」
「何處へ行くとも、貴方に申し上ませんでしたか。」
「別にどちらへとも伺ひませんでしたが……。
このお手紙を御覽になれば、お解りになるのではございますまいか。」

父へ夫へ

敏郎が封を切つて、讀んで見ますと、
旦那様、取急ぎ一筆お願ひ申上ます。
一昨日は色々と旦那様から、御親切なお言葉を頂きましたので、仰せに從つて、

お傍において頂く様にお願ひ申上げて、お別れ致しましたけれど、その後色々考へて見ました所、只今私が旦那様のお傍で御厄介になりますと、私や明はこの上ない幸福者にならせて頂きまして、有り難い事でございますけれど、それがために奥様や、二人のお子様を御不幸にする様になります事は、私の眞心がどうしても承知致しません。

二晩隨分悶え苦しみましたが、矢張り私は明と母を伴つて、旦那様のお傍から離れて參ります。

かやうに申しましても、お別れ申上げてゐますのは體だけで、心は屹度先達お約束申上ました様に、絶えず旦那様のお胸の中に住ませて頂いて、一層幸福に強く生きさせて頂きます。

さうして貴方の唯一の形身である、明だけは必ず立派に、私の力で教育して、一人前の人間になりました時に、御挨拶に參ります。

どうかそれ迄は、多少日々の御生活が御淋しく、御滿足の出來ない點がございませうともそれが浮世の常と思召して、先達私からお願ひ申上ました様に、奥様は眞實貴方を信頼し、熱愛してお出でになるのでございますから、貴方さへお心持を和げて、奥様を愛する事に御盡力遊したなら、必ず御圓滿な家庭生活がお出來になると思ひます。

折角御因縁があつて、お二人のお子様迄お出來遊した間柄でございますから、何卒お子様方の、最も御慈愛深きお父様として、奥様と協力一致遊して、信と愛との溫い力で御教育になつて下さいます様伏して御願ひ申上ます。

尚お母様の勿體ない思召、智恵子は唯々有りがたく存じますが、一旦女の道に背いて、藤村家を無斷で去らせて頂きました、不孝不貞な智恵子でございます。

今更如何に御懇情を蒙りませうとも、その尊いお言葉に甘へて、藤村家へ迎へて頂くといふ様な事は、奥様お子様をお苦しめ申上げ、御不幸にするだけでなく、人間としての道に外れる事でございますから、折角の御好意に背いて、二重の不孝を致します事は、本當に心苦しうございますが、何卒お許し下さいます様、智

惠子はお傍で御孝養は出來ませずとも、蔭乍らお母様の御健康と御幸福を神かけてお祈り申上げてゐるといふ事をお傳へ下さいませ。

尚その上に無力乍ら、明だけは私の生命に代へましても、立派に教育致しまして、世の中のために役立つ人間におほし立てましてから、お目にかゝりに參りますから、それ迄お待ち下さいます樣に、併せて御傳言下さいませ。

貴方樣にも決して極端な事のみお考へ遊ばさないで、何卒々々奥樣お子樣をお大切に遊して、御圓滿に御幸福にお過し下さいます樣、お願ひ申上げます。

尚この度は大變なお世話を頂きまして、澤山な費用をお費させ申上げました事を申譯なく存じて居りますのに、一昨日は又多額なお金を頂きましたが、かやうな事情でお目にもかゝらず、お傍を去らせて頂きますので、病院への支拂は、あの中で致しまして、後は明の教育費として頂戴致して參ります事をお許し下さいませ。

明が何と申して聞かせましても、お父樣の所へ行くと申しまして、承知しませんでしたが、母と二人で色々宥め賺しますと、漸く承諾致しました。

けれどもう一度だけお父樣に逢つてから行き度いと、頻りに願つて居りますけれどお目にかゝれば、又双方未練が出まして、折角の決心が鈍る事を怖れまして、私も今一度お目にかゝつてお別れの御挨拶を申上げ度い、山々の心を押へ、明をも無理に叱つて諦めさせ、成人してからお目にかゝる日を樂しませて、無斷で貴方のお傍から去らせて頂きます事を、深くお詫び申上ます。

申上げ度い事は、筆にも言葉にも盡されませんが、胸が一杯になつて、これ以上書く事の出來ませぬ心の中をお察し下さいませ。

何處の空の下に暮しましても、私は唯々藤村家の御圓滿及び、お母樣や貴方樣の御幸福を神かけてお祈り申上ます。

この事だけは決してお忘れ下さいませぬ樣。

それでは之にてお別れ致します。御免遊ばせ。

智惠子

且那様

敏郎は涙の目をしばだゝき乍ら、智恵子の手紙を讀み終り、悲壯な面持をして、二つに折つて右袂に押込み、今一通の手紙を取上げました。

それには可愛らしい乍ら、子供とは思はれない上手な文字で、僕のお父様へと表書をした、明の手紙でした。

敏郎が封を切つて見ると、

オ父様、コノ間見エタ時、今度ハ町ノアタラシイ大キナウチニ、オ父サンオカアサンオバアサント僕ト四人デキテ、僕ハ町ノ學校デ勉强スルノダトオツシヤツタカラ、大ヘンウレシク思ヒ、早ク自分ノオウチヘイツテ學校ヘ行ク日ヲ樂ンデ、毎晩學校ヘ行ツテ勉强シテキル夢バカリ見テキマシタ

ソレダノニオ母サンヤオ祖母サンハ、又オ父サンニアハズニ何處カヘ僕ヲ伴レテ行クトイヒマス

僕ハ悲シクナツタノデ、厭ダト言ツテ泣キマシタ

オ母サンヤオバアサンハ、オ前ガソンナコトヲ言フト、オトウサンモ不幸ニナルシ、オバアサンヤオ母サンモ悲シム樣ナコトガ、澤山出來テクルカラ、ワガマヽヲ言ハズニ、オトナシクツイテ行ケトイヒマス

オ母サンハ僕ガ大キクナツテ、立派ナ人ニナツタラ、オ父サンノ所ヘツレテ行ツテアゲルカラ、コレカラハドコヘ行ツテモ一生ケンメイデ勉强シテ、オ父サンヲ驚カス位エライ人ニナルンダトイヒマス

僕ハコレカラオトウサント一ショノウチニ居ラレルト思ツテウレシカツタノニ、又オ母サンヤオバアサント三人デ淋シククラスノカト思フトカナシクナリマス。今迄キタ學校ノ友達モ皆オ父サンヤオカアサント一緒ニキタノニ、僕ハナゼオ父サント一緒ニキラレナイノカト思フト、フシギデス

オ母サンハ今ハオ前ハ子供ダカラ分ラナイガ、大キクナルト解ルト言ツテ泣イテキマス。僕ハ大キクナツテカラヨリ、今ノ中ニオ父サンノ傍ニキタイノデス。ケレドオ母サンハソレハ出來ナイトイフカラ仕方ガアリマセン。

オ父サンコノ間オ父サンニツレテイツテ頂イテオバアサマニオ目ニカヽツタトキ、
コノ次ニ來タラ肩ヲタヽイテ上ゲルト約束シマシタノニ、モウオバアサンニモア
ヘナイカラ肩ヲタヽイテ上ゲルコトガデキマセン
オバアサンニ明ハウソツキトオモハレルノガザンネンデス
オ父サンカラオバアサンニヨクコトワツテオイテ下サイ。
コンド明ガ大キクナツテ尋ネテイツタトキハ、見違ヘルホド立派ナ人ニナツテオ
バアサマノカタヲタヽイテアゲマスカラ、ソレマデ丈夫デキテ下サイトオツタヘ
下サイ
僕ハ今日オ父サンニオ目ニカヽラズニ行クノハ悲シイケレド、オ父サンガ同ジ日
本ノ國ノ中デコノ間ツレテイツテ下サツタウチニゲンキデイラツシヤルト思フト
力強クオモヒマス
僕ハコレカラ又朝モ晩モ、オ父様ノオ寫眞ノ前ニ坐ツテ、ゴアイサツヲシマス。
ダカラオ父サン僕ヲ見テヰテ下サイ。

明

ソシテ僕ノワルイコトハキツク叱ツテ下サイ
オネガヒシマス。マダ澤山カキタイコトガアリマスガコレデ止メマス
オトウサンサヤウナラ、ゴキゲンヨロシク

僕ノ好キナオ父サマ

敏郎は、明の手紙を半ば迄續むと、涙のために目がかすんで、見えなくなりました。
幾度もハンカチで涙を拭き〳〵漸く讀み終ると、
「見苦しい涙なんかお見せして失禮しました。
院長さん、貴方にはお子達がありますか。」
「今年中學一年へ入つたのと、十二の男の子と、八つと四つの女の子があります。」
「それでは子供の可愛さを、充分御承知でございますね。」
「知つて居ります。全く子供は可愛いヽものですね。」
「ではこの手紙を一度御覽下さい。

私の若い時、最愛の妻が姙娠したまゝ家を去りました。
それから九年間、淋しい生活が續きましたが、不思議な事から、先達探してゐた妻子に再會しまして、子供には生れてから始めて逢ひました。
そして妻の病氣は先生のお蔭で治して頂けましたので、私はこの機會に、永い間の不行屆のため、不幸な運命に苦勞させた妻子に酬ゐるために、退院したら、幸福な生活をさせやうと誓ひまして、今日は入る家迄約束して迎へに參りました。
それだのに又妻は既に子供と母を伴つて、私に無斷で退院して何處かへ行つて終ひました。
妻にして見れば、さうしなければならない様な理由があるかも知れませんが、私にして見れば、堪らない悲しみです。
第一何も知らない子供に、いつまでも苦勞させるといふ事は、忍びない事です。
どうか僞りのない、心のまゝを書いた、子供の手紙を見てやつて下さい。」
院長は氣の毒さうに頷き乍ら渡された明の手紙を讀み初めましたが、深く感激して、

折々目をしばたゝきました。
が軈て讀み終ると、
「貴方のお子さんは、一年生として、これだけの文字又文章をお書きになるのですから驚くべき天才兒です。
こんな聰明な坊ちやんを、こんなに悲しませるなんて、可哀さうです。
奥さんも、どうして又、そんな事をなすつたのでせう。
御一緒にお出でになつて、坊ちやんの御教育を圓滿になればよろしいのに。
人の一生といふものは、本當にどんな運命が導いてゐるか、分らないものですね。
貴方の御心中お察し致します。」
「何事も好かれかしと、祈り計つても、こんな風になりますと、全くどうしてよいか途方に暮れて終ひます。
誰方かに行先を申上げてはおかなかつたでせうか。
そして何か最近に於て、家内の精神を刺戟する様な事があつたのでございませうか。

と尋ねました。

心の闇に閉ざされて

院長は立つて、次の間へ行きましたが、軈て一人の看護婦を伴つて歸つて來ました。

「この看護婦に聞いて下されば分るでせう。」

それはいつも智惠子の世話を懇ろにして呉れた人でしたので、

「おゝ　内山さん、色々貴女にはお世話様になりまして、有りがたうございました。」

「いゝえ、行届きませんで申譯ございませんでした。

でもすつかり御全快になつて、お目出度うございました。」

「その事につきまして、一寸お伺ひ致し度いのですが……。

實は一昨日家内と別れる時、今日私が迎へに來る迄に準備して、待つてゐる樣にと、

約束しておいたのですが、もう退院して終つて部屋に居りませず、私への手紙を先生

にお預けしておいて、去つて終ひましたが、何處へ參りましたでせうか。

貴女に御面倒見て頂いて居りました間に、何かこの事についての原因となる樣な事

がありはしませんでしたでせうか。御承知じやございませんか。」

看護婦はそれを聞くと、氣の毒さうに、

「あの私　奥樣からは、何もお伺ひ致しませんけれど、それについて若しかしたらと、

氣付いてゐる事がございますの。

それは今から丁度四日前でございました。

御隱居樣と坊ちやまが、町へ御用達にお出になつて、お留守中の事でした。

突然お二人の美しい御婦人の方が、御面會にお出でになりましたの。」

敏郎は惚として、

「二人の婦人？　年頃は幾つ位でしたでせうか。」

「お美しい方ですから、お若く見えましたけれど、お二人とも二十五六にはなつてお

出でだらうと存じました。
和服の方はお静かで、比較的おとなしさうな方でしたが、洋服をお召しになつた方は、とてもはき〳〵した方でした。」
敏郎はそれが、好美と秀子である事に氣づきましたので、いよ〳〵顔色を變へ、
「それでその二人は、どんな話をしたでせう。」
「私……　何だか御挨拶の様子が變だと思ひましたので、すぐに廊下へ出て終ひましたけれど、間もなくお茶を持つて參りますと、お客様の大きな聲が、廊下へ聞えますので、態と遠慮して立つて居りますと、隨分無遠慮な事を仰有つて、私共さへはらはらする様な事を奥様に仰有るものですから、私中へ入れませんでしたの。お終ひには何だか、坊ちやんの教育費にお金を上げると言つて、お出しになつた様でした。」
「金を？　金を出したんですつて？
それで妻はそれを受取りましたでせうか。」
「いゝえ、こんなお金を頂く理由はございません。

自分の子は自分の力で教育するのが、母の義務でございます。そして誇りでございますと仰有つて、すぐお返しになりました。
するとお洋服の方が、癇高い聲で、
「いらないといふ人に上げる必要はない。參千圓と言へば、貧しい者には大金なのに、分らない人ね。」
と仰有いました。すると奥様は
「人間の本當の幸禮といふものは、金や名譽や地位ではありません。
私は何ものにも代へられない寶を持つてゐます。明といふ子供です。
明のためには身を粉に碎いて盡す事が、この上ない幸福でございます。」
と仰有いましたら、
「それでは持つて歸りませう。」と確かその洋服の方が、御自分のハンドバックへ入れて、早々にしてお歸りになりました。
それ迄私は戸口で様子を見てゐましたけれど、餘り奥様に無慈悲な事をなさるので、

お見送りする氣にもなれませず、隣室へ入つて終ひました。
奥様も廊下迄お送りになつた様でしたが、後で伺ひましたら、ベットの上に突伏して泣いてお出でになりました。
若しかすると、あのお客様が原因ではなかつたでせうか。」
それを聞くと敏郎は唇を嚙み締めて、
「あゝ　さうだつたか。それは好美と秀子だ。
私は又知らず〳〵の間に失敗して、妻を子を自分の胸から突放して終つた。
明をうちへつれて行つて、母に逢はせなければよかつた。
何故こんなに、自分のする事は、間違ひが多いのだらう。
愛するがために、幸福を計つたと思へば、それは必ず奈落の底へ突落して終つて苦しめる事になつたのだ。
この前もさうだつた。今度も亦……
あゝ　私は一體どうすればいゝのだらう。」

敏郎は思ひ餘つて、暫くは人前も忘れて、男涙に暮れました。
軈て立ち上ると、
「かうしては居られません。何處へ行つたのか、出來る限り調べてつれ戻しませう。」
「さうして上げて下さい。奥様は何も時も御承知でも、坊ちやんがお可哀さうです。」
「何も知らない罪のないあの子に、この上苦勞させ度くはありません。
父なし子としての淋しさを悲哀を味はゝせ度くありません。
私は今度こそ、草の根木の根を分けても探し出して、自分の手許へつれ戻して、幸福にしてやります。」
と挨拶もそこ〳〵にして、敏郎は病院を駈出しました。

學生運轉手

師走の空つ風が、びゆつと宮城の外濠の、柳の枝を搖つて吹き過ぎると、靜かな水

が小波を立てました。

道行く人は襟巻やコートに首を埋めて、寒さうに歩いてゐます。

この時西の方から一臺の自動車が、すーつと走つて來ました。

と其處に立つてゐた紳士が、手を上げて合圖したので、自動車はぴつたりと止りました。運轉手はすぐ下りて丁寧に頭を下げ、

「有りがたうございます。どうぞお召し下さいませ。」

と紳士の持つてゐた鞄を受取り、紳士を車に招じ入れてから、鞄を靜かに渡しました。その運轉手の物腰態度の上品さ優しさは、到底他のそれに見る事の出來ない床しさがありましたので紳士がその運轉手の樣子をじつと見てゐますと、

「失禮ですが、どちら迄お供させて頂きませうか。」

「二番町だ。實はうちの自動車に、迎へに來いと言つておいたが、何故かへ子供を送つて行つて、ゐないといふものだから、ぶら〳〵と歩いて來て見たが、餘り寒いので、厄介になつた譯だよ。」

「左樣でございますか。有りがたうございます。」

自動車は勢よく走り出しました。

「君は一寸變つた所があるが、普通の運轉手かね。」

「はい、左樣でございます。」

「東京も君の樣な、しつかりした品性人格の高い運轉手ばかりだと、一段と都市の品格も向上するんだがね。」

「恐れ入ります。私など全く無躾でございまして、申譯もございません。」

「いゝや、さうではない。

私はこれでも、澤山〻人達を扱つてゐるから、一寸一目見て、二言三言話をして見ると、この人はどま位教育があるか、常識があるか、眞面目か不眞面目かといふ事を、見て取つて終ふんだ。

これが經驗といふのでせうね。」

「左樣でございますか。しかし私の事を賞めて頂きますのは、少しお眼識違ひの樣に

存じます。」
「いゝや違はないよ。君は唯の職業的運轉手じやない。
何か事情があつて、こんな自動車の運轉手なんかやつてゐるに違ひないと、この眼で睨んだのだよ。」
「どうも恐れ入ります。では御推察にお委せ致します。」
「あはは、、。私の眼力はどうですか。」
こんな話をしてゐる中に、車は既に二番町へ參りました。
「お邸はどちら樣でございますか。」
「そこを右へ廻つて三軒目のうちだよ。」
教へられるまゝに、運轉手は、大きな立派な門構の邸の前に車を止めました。

正しき報ひ

「有りがたう。幾らかね。」
「有りがたうございます。では五拾錢頂戴致します。」
「それは安過ぎる。これだけ取つておいて下さい。」
紳士は一圓出しました。だが運轉手は強く之を拒んで、
「規定だけ頂けば結構でございます。五拾錢だけ頂きます。」
「まあ、そんな固い事を言はないで、取つておいて呉れ給へ。」
「折角の御親切でございますけれど、それでは自分の信念が許しませんから……。」
「全く君は珍らしい人だ。何處の會社に働いてゐますか。」
「神田の旭自動車に御厄介になつて居ります。」

「名前は何といふのですか。」
運轉手は笑つて、
「名前を申上げる程の人間ではございません。」
と遂に答へませんでした。紳士は呼鈴を押して、門の中へ入る樣子です。
運轉手はそのまゝ靖國神社の横へ出て、九段坂下を須田町の方へ走りました。
駿河臺下迄來ると、美しい少女が立つてゐて、
「一寸お願ひします。」
と止めましたので、運轉手は車を止めて、
「有りがたうございます。」
とドアを開いて、客を招じやうとすると、中に先刻の客の鞄が忘れてありました。運轉手は顏色を變へ、
「お孃さん、折角でございますが、前のお客樣が、車の中に鞄をお忘れになつておきましたので、一寸お屆けしなければなりませんから、恐れ入りますが、外の車にお召し下さいませんか。」
「あらさう。」
といふ聲を後に、車の向きを變へると、又九段坂の方へ引迎して參り、宗方司郎と黑い標札の掛つてゐる邸の前迄來ると、車から下りて、呼鈴を鳴らしました。
軈て足音がして、誰か門に近づいて來ました。
「誰方ですか。」
「私は只今お宅の御主人樣のお供をさせて頂きました、運轉手でございますが、お忘れ物をお屆けに參りました。」
それを聞くと、
「あゝ、運轉手さん、鞄を持つて來て下さつたのですか。」
その聲は喜びに彈んでゐました。
そして軈て潛り戸がからゝと開けられました。
「どうぞこの鞄を、御主人樣へ差上げて下さい。」

「まあ　有りがたうございました。
折角お出で下さいましたのですから、一寸旦那様へ申上げて來ますから、少々お待ち下さい。」
女中は鞄は受取らず、そのまゝ入つて行きましたが、間もなく出て來て、
「あの旦那様が、一寸お目にかゝり度いと仰有いますから、どうぞお入り下さい。」
「あのこゝで失禮致し度いのですが……。」
「お手間は取らせないから、恐れ入りますが一寸入つて頂く様に、と仰有つてゐますから、御迷惑でせうがどうぞ。」
「さうですか。では御免下さい。」
女中と共に玄關へ來て見ると、主人は出迎へてゐて、
「どうもすまなかつた。うつかりしてゐて、大變御迷惑をかけました。」
「すぐ氣が付くとよろしうございましたのに、うつかりして居りまして、駿河臺下へ行く迄存じませんでして、遲れまして申譯ございません。」

「いやそれどころではない。
私こそうつかりして、大切な鞄を車の中へ忘れて、飛出したものだから、今大騒ぎをしてゐた所だ。
この鞄の中には、重要書類が入つてゐて、僅かの金で買へるものではないのです。
何もなかつた、知らないと言はれゝば、それ迄なのだ、君の様な正直な人の車に乘せて貰つたからよかつたんだ。
まあ　兎に角上つて、お茶を一杯飲んで行つて下さい。」
「いゝえ、鞄さえお返しすれば、私の務めは果されましたから、失禮致します。」
「まあ、そんな事言はないでもいゝじやありませんか。
一寸だけ上つて下さい。」
「折角でございますけれど、只今業務中でございますから、失禮させて頂きます。」
「では一寸待つてゐて下さい。」
生方氏は奥へ入ると、拾圓紙幣を三枚程手に持つて來て、

「これはほんのお禮心です。
少いけれど納めておいて下さい。」
運轉手は目もくれず、
「折角ですけれど、そんなお金を頂く理由はございません。」
「理由のない事がありますか。
この鞄を失つたら、私は何萬圓の金にも代へられない、損失を蒙る所でした。
それが再び私の手に入つたんだから、相當のお禮をしなければならないのだが、君の性格としては、受けて呉れないのを知つてゐるから、ほんの僅かだけ出したんだ。
是非これだけは納めて呉れ給へ。」
「折角の御厚意ですけれど、それだけは固く御辭退致します。」
「それでは私が困るじやないか。
折角君が親切で、鞄を持つて來て呉れたのに、何もしないでは私の方の道が外れるのだから……。」

「では失禮ですが、五拾錢だけ頂きませう。乘つて頂けるお客樣をお斷りして、鞄をお屆けに參つたのでございますから……。」
と言つて、幾ら侑めてもお禮の金は受取らず、五拾錢だけ受取ると、厚くお禮を言つて運轉手は出て行きました。

寶　玉

翌日十時頃、神田の旭自動車へ、電話がかゝりました。
「もし〳〵旭自動車の方ですか。」
「はい左樣でございます。」
「失禮な事を伺ひますが、お店に年の頃二十二三のとても人物のしつかりした運轉手さんがゐますか。」

「はあ、手前共の方には、二十二三の運轉手が澤山居ります。皆相當しつかりして居りますが……、名前を仰有つて頂きませんと、誰の事か分りませんが……。」

「それで御主人様はゐらつしやいませんか。」

「主人は手前でございますが……。」

「あゝ　さうでございますか。どうも失禮致しました。

それでしたら、かやうな事をお伺ひして恐れ入りますが、手前の方は麹町の二番町の宗方の宅でございますが、主人が貴方様に折入つてお願ひ申上げ度い事がございますから、一寸手前共の方　御足勞願へませんでございませうかと申されますが如何でございませうか御多忙中眞に申兼ねますが……　お手間は取らせませんから一寸だけと申されて居りますが……。」

「はあ〳〵、失禮ですが、どういふ御用件でございませうか。」

「あの　それは、委しい事は存じませんが、昨夜こちらの主人が、お店の車に乘せて

頂きまして、その車の中に忘れ物を致されました一件だらうと存じますが……。」

「あゝ　左様でございますか。それでしたら、直ぐにお伺ひ申上ますと、仰有つて下さい。

何か間違ひを仕出來したのでございませうか。兎に角すぐお伺ひ申上ます。」

と電話は切れて終ひました。

そして二十分もたゝない中に、旭自動車の主人といふ、でつぷり肥つた、洋服の男が宗方邸へ訪れました。

早速應接間へ通して、茶菓を出してもてなしてから、宗方氏は面會しました。

「やあ　恐れ入りました。

私宗方です。實は手前の方から、お伺ひしなければなりません所を、貴方に御足勞を煩はして、恐れ入りました。」

「いゝえ、どう致しまして。

何か手前共の運轉手が、間違ひでも起しましたのでございませうか。」

「いやさうではありません。實は私は昨夜、うちの車が間に合はなかつたので、途中でタクシーに乘せて貰ひました。

所がうつかりして、大切な鞄を忘れまして、困つてゐました所、直きに運轉手さんが屆けて呉れましたので、僅かですけれど、お禮を差上げやうとしましたら、何と言つても、自己の信念に反すると言つて取つて呉れません。

それではこちらの氣がすまぬから……と申しましたら、それでは外の客を斷つて來たから、その分として五拾錢頂くと言つて、五拾錢だけ持つて歸りました。

私が見た所、どうも普通の運轉手とは思はれません。

言葉遣態度が、上品なばかりでなく、非常に容貌も立派で氣品があつて、話して見ても、どうして却々普通の人らしくありません。

どういふ人物か一應、貴方ならお分りでせうから、伺つて見度いと思ひまして、それで御足勞を願つた譯でした。」

それを聞くと、旭自動車の主人は、

「分りました。貴方の御鑑識は却々お鋭くてゐらつしやいます。

その運轉手なら、私の店で寶玉といふ綽名のついてゐる苦學生でございまして、名は篠原明と申します。

大變な天才家で、小學校から高等學校迄ずつと優等で通して來ました。

所がどういふ事情か、家は餘り豊かでなく、お母さんが年老いたお祖母さんを養ひ乍ら、僅かの賃仕事をして、今迄學資を續けて來たさうですが、大學へ入つてからは、却々學資が嵩むので、女の腕で稼いだ位では、間に合はないので、非常にお母さんは苦勞するらしいのです。

それで本人も決心して、夜分だけ運轉手となつて働いて、幾分でも學資の足しにし度いからと頼まれたので、店へ入れました。

今迄も時々かうした例は幾らもありますが、皆失敗してゐるからと言つて斷りましたが、餘り本人が眞驗に頼むので、夜分だけやらせて見ました所、人間が純眞で親切で、その上仕事に熱心ですから、少し馴れると驚く程の成績を上げて來るので、私も

店の者も感心してゐるのです。
大方の晩には、二拾圓位取り上げて來ない夜はありません。」
「何時頃迄働くのですか。」
「殆ど夜明方迄働いてゐます。
大概の者は疲れて來ると、多少は仕事が鈍りますが、あれだけは實に眞面目で、お客様に懇ろですから、非常な成績を上げるので、全く驚いてゐます。」
「大學はどちらですか。」
「帝大の政治經濟科でございます。
學校でも非常な秀才なものですから、月謝は免除されてゐますけれど、本をよく買ひますから、却々費用がかゝる様です。」
「ほゝう　帝大ですか。それで貴方の所で働いて、一ヶ月どれ位給料をお出しになるのですか。」
「今の所二拾圓拂ってゐます。」

「さうですか。しかし晝學校へ行って、夜寢ずに働くといふ事は、隨分骨が折れるでせうなあ。」
「外の者が體を壞しては駄目だって、注意するのですが、本人は一向平氣で、もううちの店へ來てから、約一年になりますが、風邪一つ引いた事はありません。」
「餘程體も丈夫なんですね。」
「まああれ位頭はよし、體は丈夫だし、容貌品性人格など申分のない人物は、東京にでも餘りないと思ひます。
だから誰いふとなく、寶玉と言ひ馴らして終ひました。
綽名といふものは、誰でも大概惡い名をつけるものですが、篠原だけは違ってゐます。」
「さうですか。初めて伺っていよ／＼感心しました。
突然お目にかゝった貴方に、こんな事を御願ひしてはすみませんが、如何でせうか。
あの人がさういふ人物でしたら、私の方の家庭教師に抱え度いと思ひますが、讓っ

て頂けませんでせうか。
勿論手當は五十圓位出します。
そしてうちに家族同様に住んで頂いて、うちから通學して頂けばいゝのですが……。
さうすれば暫くづゝうちの子供の面倒を見て貰つて、後はゆつくり勉強も出來、夜も充分寢む事が出來ますから、體を害ふ事もないでせうから……。」
と宗方氏は品子夫人と相談の上で、家庭教師に雇ひ入れる事を申入れました。
旭自動車の主人は、大變喜んで、
「こちら様でさういふ様な工合にしてやつて頂けば、篠原も大變助かりますから喜ぶ事でせう。
一度うちへ電話致しまして、お宅へ呼ばせて頂きませう。」
と言つて、呼び出しました。
幸ひ日曜であつたゝめに、店へ出て居りましたので、すぐに明はやつて參りました。
「實は君に來て貰つたのは、外ではないが、このお邸に三人お子様がお有りになるの

で、今家庭教師を探してお出でになるさうだが、昨夜の鞄の事から、御主人が君を見込んで、是非賴み度いと仰有るのだよ。
こちらへ住み込ませて頂いて、通學させて頂き、學校から歸つてから、三人のお子様の御勉强のお相手をした後は、全部自由に勉學させてやると仰有るのだ。
君には願つてもない條件だと思ふが……。
御厄介になる事にしてはどうかね。」
「そんなに仰有つて頂きますのなら、誠に有りがたいのですが、僕の様な者で、お役に立ちますでせうか。」
「大學へ行つてゐて、しかも特別な秀才だから、家庭教師には最も適當だと思ふが……。」
「それでは僕の事を、何も彼もお話下すつたのですか。」
「お尋ねになるものだから、別に秘密にする必要もないと思つて、お話しゝて終つたんだよ。」

「全くこちら様では、家庭教師が御必要でお出でになるのでございますか。」
「實は今迄子供一人々々のために、三人お願ひしてゐましたが、どうも面白くないので、今度からうちに住込んで頂ける堅實な思想の方をお願ひし度いと思つて、方々探してゐましたが、ふと君に逢つて、初めから唯の人でないと思つた通り、矢張り經歷も學力もある方だから、是非御無理願はうと思つて、御主人に御相談した所でした。」
品子夫人も傍から
「お差支へがございませんでしたら、是非お願ひ致します。」
「はあ　よく分りました。
出來ます事なら、そんなにして頂けば、僕としてもそんな有難い事はございません。
家庭教師專門でなくても、免許狀も持つて居りますし、馴れて居りますので、運轉もさせて頂きます。
又書生さんの代りもお務め致します。」
「そんなにして頂かなくてもいゝのですけれど、さうした心持でゐて下されば、大變

お心易くて何よりです。」
「ではさういふ事にお願ひして、君はみつしり勉強させて頂いて、成功して呉れ給へ。
私の店でも、君の樣な人に働いてゐて貰ふと、外の者の鑑になつていゝのだけれど、君の幸福のためには、そんな勝手な事を考へてはゐられないから、私は喜んで賛成するよ。」
みんなから勸められると、明もさうなれば、大變都合がよいと思ひました。
自分が自活して勉强出來れば、母の苦勞も輕くなるし、母も安心して年老いた祖母に孝行盡す事が出來ると思ふと、幾つかの喜びがこの問題から、生れる事を思つて喜びに胸が躍りました。
だが聰明な明は塵程も顏に出さず、
「大變有りがたいお言葉を承りまして、この上の喜びはございませんが、獨斷で御返事申上げる事は出來ませんので、一應母に相談致しまして、母の承諾を得ましたら、お願ひ申上げる事に致し度いと存じます。」